英文学史提（卅八年）

本間文庫
文庫 14
A111
1

文庫14
A111
1

卅八年秋

近世英文學史

(上)

早稲田大学図書

近世英文学史

（明治卅八年十月より早稲田大学にて）

緒論

第一

~~緒論~~

諸君、私は此のクラスに於ける講義を、Moving Lectures とでも云ふべき一種の風によってやって見やうと思ひます、常に平面的に何れの部分をも同じ程度に叙述して行くことなさとは、教師の方に取っても二三度と同じ事を繰り返して行く内には陳腐になって、清気も撤はまれならないで面白くなし、又聞く方でも、何れの部分も同じ様にす

短日月の為に研究して行かうとしたのであるから勢い学術論的の平面的の知識しか得られない。それだから、どうせ平面的に得る知識は概説的のものでよいのであるが、寧ろ皆学に概論の甚しく精しいものとして先づ其の研究せんとする題目の全体を論じ、それで其の題目全面のバーヅアイビウを作り、そして従来に渡り進して其の中から種々の局部を取り出して精しく研究するといふ方針でやりたいのです。例へば~~要~~一年は一日位の概論的研究の講義で上に、ジョージアン リテラチュアの中からは

ワーヅワースとシエレーを取って細密に研究し ~~井田[illegible]~~

エドワーヂアン リテラチュアからキップリングを取り 井タトリアン

リテラチュアからブラウニングを取るとする風にして研究する、さうします
すると全体の知識は浅く廣く平面的なフラットとでも其の中に
或る部分の特に深い訳即ち焼点が出来て来ます、研究的か凸
面的になって来る、合併すると他の部分は比較的に浅いまゝ
じだいとなるが、其れは致方がない、又却って其方が面白いと思
ひます、何もかも同じやうな深さで（窪く）物知り的
のやり方は、専門的に幅狭くとも深い所のある研究の
し方が有用だと思ひます。
例へば其は（人物は技術にはいれません）テニスンの詩を研究して其れから、併和して其サ

なくともテニズンテナーしては現在世界の何人よりも深く知って居るという風になって欲しい。学者としての方面は此の風が最も肝要かと思ひます。斯く申す私なども此の方面は動しもすれば絶えず悲観ですが、殆ど無理かもしれないと思ひます。決して知識を不具的に発達せしめよといふのではない、必要の限り又好む限り基礎面としては持つのがよいが、併しそれより以下甚しくは決して欠ぐ出来なくては困ります。

元来文学者といふ風の人々は、多く知識をゴシップ即ち

(5)

噂、汚職と云ふもので断片的に自分に関心の点、おもしろいことばかり深くなり一歩行くと云ふ低個的ある論理的精神や組織的系統と云ふやうなものには縁遠しないのである。之れに反して学者肌即ち学究肌の人は凡ての知識を断片のままでも論理的科学的精神のものとして並べなければ取り上げない。随って精力には限りある以上自然に狭くなる。さうして博くは注意を注げることが出来なくなる、不具的になり易い。此二つは常に兼有し難いものと見える

さて前々もどって、其時代に或局部を選んで狭く精しく研究して之れを学生を概論の上に立てると詳細風にして行けば~~[illegible]~~私の方でも年々研究を形にして進行さすことが出来ます概論だけは仮令それにならなくとも今年取り出して特殊研究をやって行って部分だけはそれで踏まれば来年はやらなくて特定の局部を取り出す例へば来る年はジョージアン期でコールリッヂ、キーツ、ヸクトリア期で、ロゼッチ、スヰンバーン、エドワーヂアン期でワトソン又其翌年はスコットベイロン、ブラウニング、ワトソンと云ふ風に遷移して行きます

から、諸君と共に私も研究して行く、同じ事をフラットに探
り過ぎると死解釈の弊に陥ることを得る也 許して 諸君
の方では今年の方と来年の方と課特殊研究の部面
が違ふ。それはなりますが、之は即ち面白いと思ひま
す。個人の点でも 出来る丈あり得る時まで同じ事をやらない。否同じ事
はやっても、同じタイプの人間にならないやうに、各個性を抜く 能と
かしむる、自分独得の人になって欲しい。それも同じに年
毎の違って出る人は年毎の名でも違って此の事のが却

が面白いと思ひます、凡て何でもきちんと型に這入つてしまふといふ事はどうも悪い、まあ来らざりけ如何なる場合に於ても我道つてものを発揮して行くといふ事が望ましいと思ひます

から、以上私は取るに足らぬ諸君に取つても [illegible] 要とは思ひ研究方と信じて之を試みます。

其

第二

茲に近世英吉利史といひます、近世は普通は十九世紀以後現時に至るまでの意味でありまして、歴史家の

記録近世ではありません、其の頃の古の一部です。
近年まではペンコーストを応用いであったとかのですが、諸君は
此等の物は大抵お持ちでせうから、是非それを利用せられん
と思ひます、と云ふのは、引例の必要な場合に、之れを一々
書くのは大変ですし、それを言って一々原作を持って来る
訳には行きませんから、出来る限り右の書物中の引例
を利用し様といふのです。
十九世紀英文学史研究の参考書としては、ブルーク、セーンツベリー、テーン等の全部の英文学史中の其部分
は勿論、其他特に此期に関するものとしては、

(10)

"A History of English Romanticism in the 19th Century" 全 by Beers. 全 (既校本)

~~"Main Currents in 19th Century Literature" by Brandes.~~

"Victorian Literature" ( )

Interpretation of Literature and the Interpretation of Literature" by Dowden.

"Victorian Poets" by A. Sharp. (仝上)

"Victorian Literature" by Shorter (仝上)

"Victorian Poets" by Stedman (仝上)

"Victorian Poets" by Stedman (既校本)

など何れも重なるものです此外十九世紀の欧洲の文藝全体を

見渡したもの例へばセーンツベリーの時代若しくは[illegible]

サイモンヅの云であるとか、ブラレデスの云であるとかいふ人の中にも我々美文学として推すべき者はありますが、之等其他の詩篇を挙げますから之は省きます、

第三

十九世紀の初めに於ける英文学が世界の他国と同じ思潮を追って所謂ローマンチシズムの流に漂うことになったことは今日では殆ど何れも異存のない観察であります。今御ローマンチシズムといふ語も精しく申せば議論が出て色々の定義に用ひられますが、茲では仮りに知識主義形式

(12)

適度主義に対する感情主義、妨害主義、耽溺主義とでもいふませうか耽溺といふ語には稍語弊もありませんが要するに感情が成ぐに感情の[illegible]を脱出しやうとする傾向の多い様式です。

ローマンチシズムの信義に関してはさきに挙げたピーアスの書などに偉大な論じた所があります。

十八世紀は理知の如く大革命の仏蘭西即ち仏蘭西文学以〔…〕の影響を受けて、他の分野と同じく文藝も[illegible]形式的、クラシカルでありましたのが、一つは何語を

 く接〔笄〕

当てもなく文部の多様な目的に陥りて来る、此の同じ傾
向気運に駆られて早く已にバーンスの如き詩人を十
八世紀の末に出してゐる。

~~尚中の[illegible]~~

凡てローマンチシズムの個人の根本は専ら思想は既成の形式を破って直ちに
其中身を掴み出さうとするところにあります

元来人生とするものは、どうしても最高なる一つの価値を
有してゐるかと思はれます。即ち我~~[illegible]~~情と
非我~~[illegible]~~と、此境界ある限りぬ[illegible]形
それか生存と云ふ事物は常に[illegible]
勝敗の二途に出でない、即ち唯一つになり[illegible]限り

く 接

吾人は何時迄も（個人以上の差別的）存在の安全さを永さとは望むべからざる事である、人生の根本は個人的存在を許さずといふ事であるらしい。然るに現在の我等は到底個的存在の欲望即ち生存欲を（根本的に）棄去することは出来ない（宗教にもし）差別的存在の継続する限り生存は争闘である、此の矛盾之を和げるものは色々の方便をもつ（宗教）道徳は即ち此の方便である、宗教道徳の結局の目的は（如何にかして）差別的争闘の形を脱

く 接

しかしそうではありません、
斯くして人々は恐らく足一つの我れが分れて二つの矛盾し
た径路を作りあげて行く右と左と同時に行かうとする、
其の結果が文明の色々なる現はれて来るのであらう
而して茲にいふローマンチシズムとクラシシズムとの干係
も此根本義から来るのであります。即ち吾人は
先づ素裸で立ってみる事を仮定しますれば、種々経験が
積んであることをどうして離れては自分の方が危険でなか
め

く接

此に於てか之れを防ぐ為風の抵抗を少くして到る所其他の危険
物と調和して諸島の安全を保つことを考へ、即ち
自己の赤裸々の角のある所を円めて修飾して行
く、外形を調へて行く、此の点からいへば外面形
の修飾も同じく自然の子ではあるが、只先天
後天とするやうな発生の順序に差別がある、（内容の赤裸々とは）
却って斯く後天的形式的に風を涵養して行く
外には之がため一世の風潮をなし人々は知らずし

(17)

く接

それのみ進んで行く、段々外形が崩ばれて、腫物の
如き蕃色となる具合に、中身を露出して行く、
これがこの機械のクライマックスでせう。
而して何かの拍子に、此の如き蕃色の醜さ、
中身の露出せんとする醜悪が遂に破裂
すると（舞台上には）[illegible]の運を呼ぶと云ふ順
序でせう

加田

(18)

分して進んで行く人間の友誼々の方面に注意を向けしめる最大動機の一つは戦争であります、凡そ世の中に戦争程友誼々のものは無い、之れを経過すると人間が真率になると云ふのは理でせう　修飾（偽飾）を人に近いものは人に見られなくなる、之れにつれて我れ我れが（卑しくは自然に）真実に帰って見るといふやうな状態を生ずる

十八世紀末には民族条件が具備して来てアメリカ

(19)

戦争其他乾乙及中部欧羅巴の少争闘の外最も大なる戦闘を人心に与へたのは（言ふまでもなく）仏蘭西革命でせう、

英吉利（人の自由[illegible]）の戦争及び同様の（社会的状態変化）人心の（[illegible]）健康思の外外部を最も多く刺戟せられた意味があります、即ちローマンチシズムを起して例の革命的気分で、自ら華形の花[illegible]となる十五はむしろ極な備へと其他[illegible]を[illegible]立を定め成ますと心得ば平民でありませう

(20)

彼等は第一回の仏蘭西革命で刺戟せられた
前には大革命の仏ランスで刺戟せられて甚文藝の
クラシシズムを突破せては又戦争乱の仏ランス
で刺戟せられクラシシズムを脱却せんとする
の端を開きました
第二の影響は独乙思想の流入であります
独乙は最早くクラシシズムの文上ロマンチシズムを脱れた民
でありますが文藝の上では ゲーテの Leiden des
jungen Werthers が 1774年に出でシラーの

世を Reliques が 1765年に出て居ます 然るに
英吉利ではワーヅワースの
の Evening Walk の出てあるのは 1793年でありますが併し例の此派の暁鐘ともいふべきコールリッヂとの合著 Lyrical Ballads は猶五年後れて出て居ります
要するに仏蘭西革命と同じく十八世紀末唯一の大事件と独逸のゲーテ、シルレー等の勃興をほとんど同時

とが、文壇に信用して十九世紀の英國ロマンチシズムを
成したのである。

㊄ 第五

而して此期即ち十九世紀の初年より三四十年
間は彼の比較的文學一旦盛大であつた時で、
ヴイクトリア女皇の前即ちジョージ四世の時代で
す而して此期も更に二小別せられ、
卽ち初期湖畔詩人時代、即ちワーヅワース、

(23)

コールリッヂ、スコット等の文学です
第二期、(3)キーツ、(2)シェレー、(1)バイロン等の文学、
~~浪漫派~~
今は此れを以て十九世紀の前半を掩はしめば後半
は又甚しく別様の形勢を~~●~~呈しませう 即ち
テニスン、ブラウニング、スヰンバーン等の外、所謂ラファエ
リーツの ロゼッチ、~~×~~モーリス、又はネオロ~~●~~マンチシズムのオショー
ネシー等、又はラスキン、カーライル、ゴオレー、マシューアーノルド、
其他小説ではサッカレー、ヂッケンス、エリオット(メレヂス)など種々の
流派思想様式を生ずるに至りました、前期よりも

ずっと複雑になって行く訳です、
更に此後即ちヴィクトリアン、イーラを経て現在即ち
エドワーヂアン、イーラに到りますと、小説にハーディー、ゼームス
等を始め詩にはキップリング、ワトソン等、戯曲にピネロ、
ジョーンス、フィリップス、ショー等があります。

神秘。

此れはピーアス及びステッドマンの論の大要を挙ぐ

全躰研究

之を分かつて詩、小説、評論、戯曲、雑の四点から見ますと、先づ

十九世紀の英国詩歌

(一) [illegible]、ジョージアン、イーラ。

之を更に細別して㊥第一、湖畔詩人、第二 B、S、K の三星、

第一は前者は対十八世紀の反動即ローマンチシズムの前駆で後者は

正に其の同じ流を棹して却て其の犠牲となるの観があります。今

論ずるは前後者共に相和して自然派の十九世紀となるのを打ち立てたのであります

いはゆる草創期であります。次に

(二) ヴィクトリアン、イーラ

未だ日本ではかういふ時代は来ません

しい時期に入るまで準備状態であつた所の十九世紀が真の形を成し十九世紀となります、十八世紀の革命より誕生して十九世紀自らといふものを意識した形があります。即ち革新時代は其内容主義の形式主義に対する反動、感情主義の知識主義に対する反抗といふ線でありますけれども、茲に至つてまだ一方ばかりの極端でも行かずとてもやれず、言はば一層分裂のついて来る者の状態になりません。

十九世紀は非常の速力を以て理想の発達した時でありまして一方にますます強く感情主義の傾向が文藝の上に著しきに拘らず、他方には又少し科学が発達して行つて、其の結果理

なと感情の衝突となきとが至る所に種々の形となつて見はれて来ました　例へば紀中
思想家最後の問題として人生問題に於ての理智と信仰との不調
和となさとが、智識の力は殆ど宗教、信仰などいふものを根本から
動揺せしめました、然て文藝などは殊更に、感情を捨てゝきを
の出来ない、[illegible]
人には感情の行止りは宗教的信仰の擁抗に
行かうとこ之を到底離るゝ事が出来ない、今日を言へば現に此の盛ん
な十九世の理智の発達を他に評すきとは出来ない、丸で吾等は此に
於てか此二つのものを以うにか解決しやうとする試みをなして居った
其の試みは如何なる形に於てか此芸術宗教を[illegible]
ブラウニング、テニスンの二大明星であります、此の両人 其の中方

128'

H.A. Clough
M. Arnold

は全く違ひませぬが、是は用此矛盾に上に立つて孤を以て居るのが此二人で
あります。此意味に於て十九世紀の人が常に望み付いで理想と信仰
との調和と云ふやうな理想的標榜を代表するものは此二星となる訳です
二人がおのづから思想の上に於て十九世紀の最も純粋な所を代
表するのは此理由でせう、
然るに後ドトルは依然此二つのもの不調和にもがく思想も残つて
居る、之が一方にはむしろ理想の方へ進み急く行つて
クラフ派 アーノルド派の詩風となり、他方には信仰を否定も
感情、進んでは伊太利的なセンジュアリズムにまでも走つて評論あり、
ラファエリーツになつたのでせう。
以上で十九世紀の英国詩壇の大体の部分は出来ますれ

(三) エドワーディアン、イーラ

之は即ち二十世紀、即ち現在を指すのであります。キプリング、ワトソン等を以て之を代表しているのです。

さて以上の位でざっと詩史の梗概を述べませうが、他の方面を述べずに後個人的研究に入りませう

ジョージアン、イーラ、Georgian Era

George 三世のもいお死に引つゞいて、George 四世の代と之ぐ十ね十八世紀の終を十九世紀の初めを覆うておて ヴィクトリア女皇の即位は一八三七年となるのですから、ペンコーストに依て十九世紀最初の一ゼネレーションを即ち一八三〇年迄までをざっと the Georgian Era と呼んで置きます

(2) 9

近のヴィクトリアン、イーラを代表するテニソン、ブラウニング等の諸作の出る

(30)

丁度此一二年間であろし、スコット氏の死も此頃であろし、バンコースト氏も経つば英国に生れて鉄道といふやうな驚くべき全盛を人をして驚嘆せしめ
ぐであらうと思はれるの出来るのも此頃 Lyell の "Principles of Geology" といふやうなたが出来て科学界も充分をしたのも此頃であるとなるのです
から
而して蘇[illegible]氏時の北の事は英国では夫のコールリッヂ、ワーヅワース共同の "Lyrical Ballads" の出た一千七九八年を以て始としますせう始る
十九世紀の始め前後からと思って宜しいのです
而して此る英国の殊に重要な事では、ワラァルガーの大戦争、アメリカ戦争、ウオタールーの大戦とか、皇后に民心を刺戟する出来事が起りましたりの、あろく、国にはネルソンとかウェリントンとかいふ
[illegible] 人物が出まして、外にはアメリカの独立、仏蘭西の革命などが

(311)

具合[illegible]でありますが、同下の日本の事情などと思ひ比べて見ても、狂人なども随分出る程に人心の圏の浮きたち攪き乱されて居る事から思ひやられるのです。文藝は斯る人心の奥の此の感情の主即ちソールといふ（我々といふても実体といふても）何と言ふてもよいが此の深奥の[illegible]直接に触れ[illegible]之れが濡れ出るものであるから一時[illegible]的生活にぎっくりした時勢に文藝の出現はの当然であって其の作物が益々此[illegible]した思想を現はして居ます。ポトリアル文学の落ついて来た風格と遠子の性此の生でせう

第二 湖畔詩人 ― ワーヅワース William Wordsworth

湖畔詩人と云ふ名は誰れが初めたか知りませんが、当時から呼びなされてゐまして、ワーヅワース、コールリッヂ、サウセーの三人を呼んだものであります、此等の人々が北英の湖水地方に住

poetic ニ之を描いて此処で此田園生活をやつて静に加へし当時の

天稟に元気横溢たる活動を計畫しあるの也而

参考には伝記の付録の外 Leslie Stephen の Ethics of Wordsworth 及

この Wordsworth Society の会話にし Prof. Knight の書いた本に

千古名作の Wordsworthiana 及び M. Arnold の Selections

其氏の其書に 書 おでせう

ワーヅワースの伝記は特にありませんし
まして何れの集を見ても文学史を見ても一通りは書いてあります
けれど詩で謳はずとも知りやすいが重なるも来ることを見れ
ば彼はクラッシャーやゴールドスミスの如き荒村の詩のある
年の若き（四月）で八十の寿を保ち死なずに大陸旅行（之ば）
詩りも佛蘭西革命にも同情し、詩り好の人であってよろしい
子若い頃は自然死に少なかった危険な思想を抱いての
ことらしいが世上の変遷につれ佛蘭西革命の結果の思
はしからざるを見ては彼もまた失望せしめ後で段々保守的の思
想になりてしまったらしい。（同時代の大詩人）コールリッヂとの交誼や妻妹の同感で平和な
家庭を作ってをりまする、彼の地に於ける景色も理想的の田園詩人で
あったのであって（注）読み好きな友人の勧めで大人の将来を見込んで

(Raisley Calvert)が死んで献身せしめた 年々九百磅 即ち九千円

程の収入を財産上に得りたので此種の物質上の不満は丸

それ故彼には幸福であったので

此人の初作は彼の An Evening Walk と Descriptive Sketches で是は世

上の注意は全く引かなんだが Coleridge は早く其天才を認めたと云ふ事です。

併し真に此人の世に出たのは今後年の Lyrical Ballads と

いふ本で之はコールリッヂとの合著で、コールリッヂのは有名な

The Ancient Mariner で之れは奇々怪々でコールリッヂは超自然的なもの

を書き ワーヅワースは平凡の材中に非凡を見出さうとしたのである 而して

両人とも当時のクラシズムに反抗しやうとしたのは同じであるが 此の新な

言語で平易と思はしいやうな句を作って Lyrical Ballads の中の

ワーヅワースの詩中では "We are Seven" The Solitary Reaper など有名なものである

(35)

(Excursionは初版五百部[illegible]六年後の再版 5[illegible] 又五百部)

けれどは初め僅に五百部しか売れなかつた しかも其時の批評壇から
酷評の為平素の評に逼ぎかうして攻撃せられ[illegible]と
[illegible]降り出来た際は此攻撃が一層激しくなるも
る方面が散じ去つて ○昔は一つ位此市二階に其文を掛けた大に自
らの主義を主張しきれんであつたさうです けれど二人の詩人の原稿料は
初版が五百円許二版が千円許りであつたさうです 此人の主作は
将来 "Excursion" としてあるが近来は却つて其 Prelude の方が一層
好まれるほどよく読まるやうになつて居ます 前者はワーヅワースを余りよく描かず
要して居ない 後者は真に詩聖の事にあるといふ意味です 其外
には "Lucy" の詩 "We are Seven" "The [illegible]" "A Night Piece"
"Ruth" などが名高いのです "Tintern Abbey" "Ode to Intimations of Immortality"

彼人の詩才は到底むらであって、或時は非常によく或時は余りに粗雑

若しくは平板若しくは小児的であると云って可である

彼の詩想が常に自然を詠じて其中に[illegible]遠く離れ[illegible]

即ち神を見出ださむとするにあってはいかにも漠然で、随って其詩調は常に平和、

支持の値を帯びて居る。けれども其神は十九世紀の神であるから我が時代の

思想感情の形であって、即ち彼等は自然を歌ってるが実は自然の中に彼の

性質感情を躊躇せしめずして之を歌ひあげて詠んで居るのですから其処にも一種の

秋時も吾等彼等みつから自然の[illegible]中に[illegible]詠んで居るのですが其の

主が選ばれる[illegible]に選ばれるものとなって

近代は人[illegible]がよく大詩人として承認せらるゝやうに世界の変じて

行くのか[illegible]けるのは[illegible]年後[illegible]彼人の思想に

近づくのであって、[illegible]は近からず殊に活動的に非常の人気を占めて居る

伝記詩学と云ふに至ってのです（[illegible]年に[illegible]で[illegible]

彼人の作才

[illegible]始めてワーヅワースの真價承認の文を掲げ之れ賞讃

的なターニングポイントです作に の Edinburgh Review の Jeffrey は当時

文壇の最も勢力ある批評家として、あらゆる新派の文藝を排撃した人ですから

であらうが、セレーであらうがバイロンであらうが、皆此れに手を焼かされた人

であるから、ワーヅワースも其の一人であったのです

コールリッヂ Samuel Taylor Coleridge (1772-1834)

始めて直接に彼の文学を世界に推し出した人で、ワーヅワース兄妹と

同じく湖水地方に住で居た生活はワーヅワースの幸福なるのと正反対

に貧窮で体も気分も弱く不規則であった

(38)

コールリッヂ Samuel Taylor Coleridge (1772–1834)

彼は（彼が生涯の或事件は）牧師兼小学校教師の子也 彼の半生は浪々の人にし

て彼の生活の不如意はワーヅワース之と似る者也 ニテアムの[illegible]読書もし[illegible]

宗教論をもなすもしくは論文半途的不完成的也 彼の心的状態すこぶる

狂的で不健全的也 オピアムを好んで飲みし結果として身体も弱りたり

老年に於てはしなくも彼の身体も精神の上にも影響せしならん 空想的 dreamlike

せしめてよかりしならん 暗くはサウシー・ワーヅワースと共に湖畔に住みしが

1810年[illegible]乱離を[illegible]サウシーしめ為に[illegible]しけり 晩年ロンドンにて

[illegible]のものを[illegible]きし[illegible]に死せり 彼の交友には前記二人の外バイロン・ラム等あり

彼のロマンチシズムの出先是は前に述べし如く 超自然的神秘的方

面を写せり 而して其代表作はワーヅワースと同様にて Lyrical Ballads の中に出せし

Ancient Mariner 也 外に 長篇にて Christabel 叙情的 Love

二 Lyrical Ballads

Lyrical Ballads ハ共著 廿四篇を彼の作の最も世に名ありしものとす中にも

余考ふるに或人之を評して Lyrical Ballads 中 Lyrical Ballads ハ一篇にて此作を以て道 文

最初の一篇は最も彼の特色を発揮せるものにて神秘的超自然的として

最後の Lyrical Ballads は 其筆全体は 年の作なれど他の三篇

はワーヅワース 判断せられし作物ならず は

ナヅラ、カールは学殖を研して中途に其文脈を定めずとせし

ワーヅワースとコールリッヂと二人離合の際、年史的は花形の模様を

自覚の

見て之を難じ両人よりて何物をか作らんとの議成りワーヅワースは先明、

コールリッヂは花形を物するにならず此のみの方おのづから両者の

思想の風格と乃合するは面白し此詩一毛水大の場上の実際の物像と

して未だなりしも時は Ballad 体にて之が当時の反抗的現象の一なりしなり

又彼ら文学訓は 神は当世の之に離を解する者の故ならず之

らツボール全体の生命には非ざる一面なるか此人はまさに詳論せしして

論じこの

コールリッヂの詩はワーヅワース、サウジー等に比すれば初めは余り感服せられ 古人

ざりしが而して最も注意すべきはワーヅワースと共にコールリッヂが Ballad

形式をしを以て小唄の時を大胆に明しなりし也 Ballad だもに二三年前

前に試みしに比すれば是ら形式上にては最も新しき調子、直接に土風を

去て中身に到達せんとする思想の此にも見ゆれ共足ワーヅワースの詩は

調子殺、コールリッヂの詩は調は曲絶好なりし故、後来詩としては寧ろ

（信）らしき味あることとなれり、詩の音律の（自然なる声を）よりも古事じしから也

此方

殊に詩の外評論には一生面を開けり。人世文ワーヅワース詩の主題は其人の
Biographia Literaria の最もよく記載せられたり。其他此で思想に於て移植し
ここを基点の思想界に引きつけるの端をなせり。人世には或は其の才識は
German 哲学の脈なりと云ふのあり。此人の詩では最も大なる像の議論なるに
ありしなるし

~~此の文章に於ては Lamb, De Quincey, Carlyle 等~~

其の子 Hartley Coleridge も天才あり 娘の Sara 亦然り

サウゼー Robert Southey (1774 – 1843)

詩人として前の二人と同じく湖畔地方に住みけれど才は二人よりも遥に
劣りたりし只天性善き人なりしなるし 或は評して実に凡く

同派の[illegible]路[illegible]回せざることなきあり 1813年 欽定
詩宗の称をScottにより辞退しもScott之を推してSouthey之に譲りて其冠を
戴く。然れどもバイロンには悪口せられて俗の人なりし、晩年精神衰へて逝去せる
気味あり。Thalabaの東洋的題材を歌ひ其他The Curse of Kehama, Roderick等あり
散文としてはThe Life of Nelsonなど最も名あり
以上三人の湖畔詩人を以て英国詩壇に於けるローマンチシズムの先駆とすれば
其の第一人たりしは二箇の源流を卑近にして世人に味はしめしものあり
詩人としての名誉是れなり 特にお伽草子に詩の形式を即ち詩人としての時代
を開かしめたるはSir Walter Scott (1771–1832) はエヂンバラの
人也。詩の初作はGoetheのGötz von Berlichingen 即ち革命的劇曲の翻訳
にして独人に負ふ所あり思想の影響ありしを見るべし 後日の[illegible]之名を定

(42)

此作は Lay of the Last Minstrel にて始で發し Marmion, Lady of the Lake を出す 中にも Lady of the Lake は余が最の傑作にして自然の湖山の上に眼を放ちて中世の Romance を詠じたる也 其評判も方々に非常のものにて殆ど古今空前の有様なりき 而して其の斯く世間に歓迎せしは主として其韻語の調が深き趣味的の興味に結びつき遂に直ちに解せられて而して其作には少年的の仕組みあり讀者を一種の心に快よき朗誦に耽らしむるかなればなり 詩人としての價値はワーヅワース、コールリッヂに劣れどもロマンチックの趣を世に弘げし功は甚大なり / 次に Byron の Childe Harold 出るに及んでやスコットは自ら其天才が其の點に非なるを察知して Waverley Novels に至い新天地を開けり 小説の方に轉れり 後は此方に盡されき 其重價は之に依りて更に大に發揮せられ了

Scott

の大城沢に非ずして小説に事や言ふまでもなし 是れ出氏 もし此路のスミットは
小説の部にて説くべし

第三、三文豪 Byron Shelley, Keats 時代

是は Georgian Era の後半即ち Byron の Child Harold の出た 1812-18 年より 1830 年頃

即ち十九世紀初 Romantic の後半を占むるもので、併相當な年代から云へば之れとも云はつきりは

（テニスンの出現スコットの死後まで）

言つてない。バイロン迄で、シェレー迄で、後ろ Wordsworth の Excursion も Coleridge の Christabel も

出ての後であるから併し兎に角男ばかりの時代に於ける些か出来事で、

即して此一團の詩人は何れも其の浪漫的生活、不幸短命といふ事など實で似て居る。又感情的若しくは感傷的とすればでも似て居る。又 Sturm und

Drang の一面たる文藝と實踐生活との混合、即して文藝的見地から言ふと

個主義で實を此迄は破壊的傾向といふ事が形に於て居る。併し外面から見て

夫れは組成て居るが、此の最後は手に四段から見ると、キーツを除外せし三人が、バイロンの

とシェレーのとは富道ひが出て来る。バイロンのは自我を主として破壊、憧憬

(45)

的悲哀で、Don Juan 又は Child Harold はまた此の調子を嫌って居ったに反して
Shelley は飽まで理想的な所はで Adonais などを見たような一個の魂の交
收を手にとって宗に集まってゆくところが面白いのである。又 Byron の悲観的な思想
いつでも色々の説が Natural Beauty を描いたものは少ない。唯だ遠流に自分の肖像
を書かうとした、即ち至るところ其の意識の底にあるものを写させずに常に其の姿を
描くような気味があるので、何も他の詩人のようにやしく失望から由ってくるのから
生まれた厭世家ではなかったというのですが、其の方は先づ下からないとして
それ Byron まではまだ京に落ちた Thomas Campbell (1777–1844) Thomas Moore (1779–1852) 等などもある
カムベルは軍歌で名あり ムーアは小唄で名あり
George Gordon Byron (1788–1824) の如くて世に出た
ものは Hours of Idleness 詩集 で其前にも其の中の一部は別に私方に出版
せられたが今はなくして出て後が知らなかった。
Hours of Idleness も余り行はれ

はしなかつた。或は此の書の為め批評家は大に詩壇へ野心ある者から許は

全集を（継承する）とれ為すやうなことを示して気になつてゐると思ふ人もあるけれども其は

どうしても此の時代の事ではない。一回にバイロンより如何はしい事を言つて

当時の評壇の泰斗たる Edinburgh Review は元に猛烈な攻撃を加へた

Edinburgh Review は何れも旧慣を守て一切高踏的で論を掲げて高調して

此れから其の評をもらはれるかはわからん [illegible] で其れより前おもしれると

~~あまりはなしはおもしろ~~ なかなかバイロンは大に激して English Bards and Scotch Reviewers と云

ふものを書いて大に其の評家及び時の文壇を罵つた。但し此れは前から Byron は旅へ

出る時の事を丁度此の際 Edinburgh Review の攻撃もかへつてきつと

ものであるが、それ丈で中の大部は当時の流行の詩文を罵つたものである。例

せばワーズワースもサウゼーも罵り飛ばして此の時です。此の点で世界に無力

偽るなかれ一書であることは事を注目するに至ては文界を為す

又は思はなかつて、此れによるとワーズワースは幼稚 Childish で Southey は prattle で

(447)

は ballad monger Scott は Bard であつて 此も当時の詩人

凡てを圧倒して 但し Campbell 氏の如き 何らかの賞め [illegible] 然るに 1809

年で 書いて 其の年 大陸旅行に出て 伊太利に行つて 二年の後 帰つて

始めて 表はして Childe Harold's Pilgrimage の 初二部を出版したが

年で 此の時から 即ち 名を I awoke one morning and found myself 1812

famous と 自分で言つて 大評判の 名で 乱れ [illegible] て バイロンは 革命か 悩の

詩人と [illegible] ロンドン交際場裡の 王になつて 四周 に 七年を 重ねる [illegible]

と 云ふ者で ある 此時は 二十四才 男ぶりは 又 Lord なり 男振は 美しし 其の [illegible]

の 凄しかりしは 実に 余りある 豪華な [illegible]

此の詩の 魅力の [illegible] 火の如き 熱情 [illegible] 明り 亦 其の 中 一節 に 之え

に 語 Welt Schmerz 即ち 厭世 [illegible] 青年の 詩としての 美を [illegible] 快楽の 声の

[illegible] ゲーテの Sorrows of Werther Chateaubriand の René、

[illegible] Sainte Beuve など 早く 見えて 多感時代の 特徴 [illegible] 男子を 歌

(48)

いふからで之が即ち青年の一世を浸して居る　思ひあへるとする者が此時の詩を出る
よく見えるのであらう、此の文は凡そ内外経験しぬれ得ればあらゆる哲学の足跡
快楽主義者の
なし得ればり此の考への彼の生涯をかけて快楽的なものと
~~其快楽の~~ ~~其の目的は基礎が~~ 彼は早く結婚し妻が永く生まれて別れた
となって其の理由には秘密があるが定めし自ら世へ出でしての因果の方に絶し
てバイロンを排斥したバイロンは即ち再び革命を起して神を制して以て
Shelleyと会って二人の遠征をなせしが此で落ちたることを子の生涯
実でもあらう、従って年々Shelleyが溺死して此後がバイロンの文学的精力も退いて
来るのはこれ、彼は本作りと他の方面に行動を期したる其理の際に倒
の希臘の独立戦争が起る事が始まる、之に剣を提ぐ持して
併し其の文は未だ偉大なる作として後世に伝への
作品前に其の外になるの劇曲たCainは其年に成る、又詩では
~~[illegible]~~ Don Juanが最も見るべきものでもあり此は未完成であ
るが結局快楽を追うて迷ふものゝ運命を描き出したものといふてよい、

(49)

バイロンは外て様に死 仏なかに 非常の 評判を 受けして 大陸では でも其 思ひ作る 命令の大 詩人とし 何か羨 考に大陸 因で… の…

~~……~~ 或評家は之を以て彼の最大の作ともいひます

次は Percy Bysshe Shelley (1792-1822) あり 少時より抑壓を嫌ふの

性を受けて居ましたが小学校時代の逸話があります オクスフォードへ来りし時

は不連 The Necessity of Atheism と云ふ冊子を書いて大学当局に睨まれて退

校せしめられ 孫間もなく ~~…~~結婚十六才の~~…~~田舎乙女と結婚して

そして時に僅か十九才 後十八年に始めて Queen Mab と云ふ詩をかりして

結婚をした物件上の判断に於て多様の争論を率し 後に帰あって

妻と分離して大陸に逃げた 跡で妻は自殺して 後に帰郷して

妻の父には親切をつくしからず 悲しみは~~…~~の説には が定用

其時のシェレーは世に容れられず 1818年永久の国を辞し再び大陸に

行く 1821年 Keats の~~…~~死を憤慨して Adonais を書いた。1822年

7月は ~~……~~ を訪ねて友人と小舟で行って帰りに暴

風に逢って難破した 十日許り経て死体は浜へ寄って Leigh Hunt も来合

はして遺ハイロンと共に之を焼いて シェレーの性格は全く常識以外

[illegible]世に[illegible]詩聖詩人と[illegible]

した人であつた[illegible]彼の作で[illegible] The Sk[illegible]

Ode to the West Wind より[illegible]

~~[illegible]~~

A Lament [illegible]と

[illegible] drama には Prometheus Unbound 最も[illegible]劇曲として

の成功[illegible]、我が Romance [illegible]

の最大作は君の Adonais [illegible] ~~Keats~~ [illegible] ol

have dipped my pen in consuming fire for his destroyer.

[illegible] Keats 君の[illegible]

けの詩で[illegible] ~~[illegible]~~ [illegible]

とせられ[illegible]は The One remains, the ~~[illegible]~~ many change and pass;

(51)

新しき事を
甚しく之に
試みたに
ロマンチックの
[illegible]
[illegible]

(?)

Heaven's light forever shines, earth's shadows fly;
Life, like a dome of many-coloured glass,
Stains the white radiance of eternity,
Until Death tramples it to fragments.—Die,
If thou wouldst be with that which thou dost seek!
Follow where all is fled!—Rome's azure sky,
Flowers, ruins, statues, music, words, are weak (?)
The glory they transfuse with fitting truth to speak.

John Keats (1795—) は病身で肺病的で神経質であつて余りに
九才前も多けれど長けて[illegible]書でありしが 案外大きりしは[illegible]
~~Temple~~ の Poetical Powers を読んで大に動かされ詩をかく事を決心
しことがあるすぐある。由来 Homer 彼の思考の調子はむしろ
希臘的といはんよりは寧ろ[illegible]七人七一して むしろ静な夢をもって[illegible]
1818年に出した詩集 Endymion とする七週間に Blackwood's
Magazine と Quarterly Review その猛烈な攻撃を受け

之が元になって彼れは病みついて遂に羅馬に仆れたといはれて居る
前言つて[illegible]微別な序文が来た[illegible]であるShelley ハ Shelley は此れを
甚く信じ[illegible]信じたのであらうが併し Keats はきつと
も思ふのであらうがらしいのである[illegible]肺病の[illegible]で死んだ
のであるらしい併し[illegible]神経質の人の[illegible]誌で[illegible]とする
必ずしも其根ともいはれないのであるが実際に重じて
[illegible]に Rome で死んだ、彼の作ではその[illegible]に Hyperion,
[illegible]其外に The Eve of St. Agnes, La Belle Dame Sans Merci, The Ode to a Nightingale,
The Ode on a Grecian Urn 等あり 彼れの[illegible]の材は[illegible]
感情[illegible]九調和して[illegible]テニソンをも[illegible]程の
理由あり、

(53)

ヴヰクトリアン、イーラ

云ふで十九世紀後半英國詩壇を数ふるのですが併し其實は今少し前即ち凡そ千八百三四十年から始まります テニスンの出たのは此頃ですから 但し嚴にいへばテニスンの真に詩壇を支配したのは千八百五十年頃からですからどちらでもよいのですが このヴヰクトリアン、イーラを茲にはテニスン、ブラウニング、第二、新情緒派、第三、知識派と以上に審美派を加へて述べませう

第一、テニスンとブラウニング

Alfred Tennyson (1809–1892) は Lincolnshire の Somersby と云ふ所で生れた 兄弟姉妹も多くあつたが兄の Frederick と Charles と三人は就中詩才があつて現に其の匿名で出した十八才の詩集 Poems by two brothers は其實兄弟三人の合力に成つたのだと云ふ話です。八つ位から Thomson の詩を覚えて

其の真似をしすら相もじては Pope の Iliad の訳を愛誦し其の口吻などを真似しれんで
後には[illegible]と豊[illegible]英人を贈けて文を作ることで父が忠告して少しは[illegible]人の言を以て文
を書くのが[illegible]似て面白いと注告したなどと云ふ。Scott の
詩風を慕って文をし其似して見たらあるが文の面白いのは五六七八才の頃野原
風の日などには外に走り出で、風の中に立って I hear a voice that's speaking in the
wind と叫び、又[illegible] Far, far away と云ふ句がどうしたものか小供の耳
には非常に快く響いたとみえて[illegible]は彼の著作的同感の特色を示して居る
ものとも見られる。彼は七才にて Louth の学校に学んだ。前にいった兄の詩集に見ゆる足と[illegible]
著は全く年十九[illegible]にあたるもので別に取るに足らないが備し十八九の青
年の作としては稚気が多いと云ふ評である。彼はケムブリッヂに居る間の友人の中
に即ち彼の大作 In Memoriam の主人なる Arthur Hallam もあったので、両人は
中途で共にサウシー、アールリッヂ[illegible]の如く当時 Spain の独立を助けんと計画した
りしなどもある。[illegible]彼の始めの日本の詩は 1830 に Poems, Chiefly Lyrical と題し[illegible]
出したとすでに世の注意を集めて[illegible]は[illegible]であるが併しこれは当時の諸雑
誌から手ひどく批難せられた。後十二[illegible]しも其の発表を[illegible]摘むる

矢を放つて行つて行くのである。而して此初作の一評は他の二三の場合と
異なつて却つて彼を修養として非常の多数の修養を[illegible]つましき事となつてしまい
立つ一は[illegible]の[illegible]一場として其悪評を気にかけぬが結局は好結果であつたの
である。[illegible]の詩集中の[illegible] Chariel, "[illegible]" 其他 [illegible] "[illegible]" 二於
[illegible] "[illegible] Fairies" などは人のよく知る作です。[illegible]の[illegible] poems の此の方にあるもの
[illegible]詩集の中から選り出して行く（[illegible]世に知られた[illegible]の全集す）しれなので
すけの時代の作から[illegible]已に其の非常な[illegible]的な才能は現れて居ると評せられて居
る併し此の作は何れも[illegible]に不[illegible]な式で確乎たる思想の根拠がなくつて
とかく[illegible]の[illegible]の拠らない人の心を取りためる所がない未熟な[illegible]を示してある
例へば Chariel の二[illegible]節の

"Out ere the beetle hummock
Outwent the thicket lore;
Out roam the wild bee hummock
About the maid's head stone;"

(5-6)

At midnight the moon cometh,
And looketh down alone.

又此次の"Lilian"の~~[struck]~~如し

Airy, fairy Lilian,
Flitting, fairy Lilian,
When I ask her if she love me,
Claps her tiny hands above me,
Laughing all she can;
She'll not tell me if she love me,
Cruel little Lilian.

の如きは其の音楽である。さて千八三二は~~[struck]~~三年立って更に第二の詩集"Poems"を出したけれど至って縁少き音楽的な傑作にして玉を盤上に轉ばすやうな句法は益々妙境に入り後日彼の集中の新しき小詩として"Lotos-Eaters" "Palace of Art"等は概して此期になって

(57)

"Dream of Fair Women" などは其主なるものである、此期に入っては稍前期よりも思想も発達して来て深い徹底が見える、其より代表的なのは Palace of Art で、一つの哲理をたとへて居る即ち霊魂の為に美術宮殿を建てゝ（併し精を尽した）
京み主として此世から掛け離れて居りしあるが終るは失張りそれ自身許りでは満足が出来ずまた人の世にあこがれ屋に帰りたくなつたと云ふので

So when four years were wholly finished
She threw her royal robes away,
"Make me a cottage in the vale," she said,
"Where I may mourn and pray."

とある結末の前の一句が甚だ解るを示して居る、併し右の句を読んでもおかしい下手な人全体の思想が此處ではまだ大に曖昧と云ふ気味を免れぬ、深さが足らぬ幼稚の見を脱せぬ "Lotos-Eaters" に至つては其の音楽的の口調の好は古来之に比すものなしと言はれて居る例へば

How sweet it were, hearing the downward stream,

(54)

With half shut eyes ever to seem
Falling asleep in a half dream!
~~To dream and dream, like yonder amber light,~~
~~Which will not leave the myrrh-bush~~ On the height!

詩人の一例が示す如く全篇凡て此の調子といってよい。
斯くの如くテニスンは其の技巧の方面から見て甚だ発達した點で全界の文学に比なき迄精美の句を作り出すに至ったのであるが、其の許りでなく時代の要求は隠されなかった、時勢はもとより何かの深い思想に触れたものを求めてゐる、すると詩人の大を成す所以は文字内に思想の方面に根拠あるものでなくてはならぬ言ふ迄である。けれど第二詩集も同じく当時の批評は不満足であって、此の転てか作者は十年ある引篭って一心に芸術とふことを錬って、丁度十年の後に其来つ詩人の歴史にあっては類ない異数である所の例に依って修養を文字通り行ひ遂げ修行して到って詩人となれば

(59)

此人を離して別にすべきであらう。或る時にこれ世に[illegible]として[illegible]人である。而して彼の老年まで中三の詩集を出し[illegible]新体詩二巻で二巻には前年の詩を批評するに就て自ら訂正し[illegible]推敲して訂正したものを載せ下巻に新作を載せて、其の中に[illegible]

ここ[illegible]に[illegible]ら[illegible]を[illegible]例とする。而して概して其思ひながら老年で大に固まって外形の相目とれ対するに至っても[illegible]とせずして[illegible]時人気の非常にあったのは丁度[illegible]に[illegible]とか[illegible]であったことが景[illegible]の[illegible]趣味の上から言っての[illegible]である。[illegible]の大作の[illegible]の域に[illegible]は[illegible]に[illegible] Princess で[illegible]は[illegible]の

大同[illegible]婦人の[illegible]とか[illegible]七詩[illegible]

[illegible]を[illegible]の[illegible]当時の[illegible]しい[illegible]の[illegible]

の詩である。即ち上の[illegible]の[illegible]の[illegible]

[illegible]と[illegible]

即ち婦人は毒を賦しとし[illegible]業をもしとしても之は[illegible]目的で
強ちは毒を降るまでである、吾しで[illegible]ぬめし其つもは全く無くなるとも
ならず其記で[illegible]をれ依り[illegible]にし、一の女を全く之れを毒する男
を慰みなりで[illegible]記に[illegible]する業なりしこのかなお目みつからぬ毒の
力に屈するとするのである、或は此作を評して最もテニスンを代表
するので、其の趣味は Italy Classic Italy medieval だが
其の姿 sensuous は modern feeling であるのか、誰であ
ることは中に見る事ぐ或るものは Poe に The Raven の如きと
大なりあって クラシシズムを代表するに対し テニスンの此の作は
全然ローマンチックを代表して居る。而し二つながら技巧に於いては
古今独歩のであるといふ、彼には即ち[illegible]に彼の最大傑作と
いはゆる In Memoriam に[illegible]の50年のある 此年頃テニスンは

はまく Wordsworthの後を受けし Past Lessonsにあらずして御
の結婚もせずであろく、In Memoriamは即ち十九世紀の大
問題たる信仰と理智との衝突に触れたるもので、其の時の
性質が已に懐疑的の傾向を帯びて居たる故尚更来りしならず
大問題にして解せて来て而して其最後の解決は信仰問題に
帰るのである要あすれ

Perplext in faith, but pure in deeds,
At last he beat his music out.
There lives more faith in honest doubt,
Believe me, than in half the creeds.
He fought his doubts and gathered strength,
He would not make his judgment blind,
He faced the spectres of the mind
And laid them: thus he came at length

(68)

To find a stronger faith his own;
And power was with him in the night,
Which makes the darkness and the light,
And dwells not in the light alone,

などいふが純粋な十九世紀の感じである。而して西洋人は霊の帰

る、然し基督教的であり已にであらう、而して其は詩人[illegible]が其である

（理神の帰）併し其の調子は變化の信仰なのに比して[illegible]

無い、然し或者は之を以て[illegible]寛容するテニスンとしては徹底して居る感を引く

点とする（Saul の[illegible]の違）此等は ほとんど自分の考へを すこし古風の傑

作と或[illegible]は之にまして大に[illegible]としテニスンの大傑作なりとも

云ふのであるが（Passion に於ては之と Shelley など）すぐテニスンの人に

思はれ作を最も善しとすると信じへしまひ のその[illegible]も[illegible]

Idyls 説といって居る。失意の迷[illegible]から成りたって居の[illegible]

比喩である。

For a breeze of the morning moves,
And the planet of Love is on high,
Beginning to ~~faith~~ faint in the light
On a bed of daffodil sky,
To faint in the light of the sun that she loves,
To faint in his light and to die.

以て其一斑を察すべし 又 1859年には Idylls of the King
スアーサー王々于の物語を詠める者、新羅の作と併せて[illegible]
1864年には Enoch Arden 等、雅俗を通じて大人気を[illegible]
殊に過去の歌謡せられし詩とし（物語的抒情詩として）ては
近世之の区别の如き ― 以上他 其二三の作は何れも讀むべし

細きもの嫋々たれしくの[illegible]言ふ可らざる妙あり 蓋し英詩の melody
の一斑を味はんとするもの[illegible]も 容易にして 文字も解しやすきものはテニスンで
の短詩に如くなからん 何人にも少しく工風して吟誦しやすく
其は其味を略解し得べし 唯大なる詩は[illegible]しがたし
平庸[illegible]なる方が勝てるものも とても一読書もよく
之れを尽せり 家は古来は一種一世を妻せんと欲せられて論ら
ざりし人は稀なり
さて全時の詩とさば予は此詩人に理知の調和なられるを味はんで
十九世紀全盛の果実を食しうる所を味ありと思ふが 他の一二の詩
家の言を引けば セーンツベリーは彼れを以て fresh and original と
なせり Chaucer より Coleridge に至り[illegible]其なく又大[illegible]

(65)

題目を捕ふるに於て Spenser に劣り、華麗、広大、渾遠といふ如き
点に於て沙翁に劣り、偉大崇高といふ点に於て
Milton に劣り、遠大的重量及び深厚の点の自然に
繊巧といふ点に於て Wordsworth に劣り、
非界的なる点に於て Shelley に劣り、悲哀自在といふ点に於て
Keats に劣れども亦甚だ芸術に於ては沙翁の外何人にも
劣るものなしとせり。Victorian Literature の著者 Shorter は
之に名づけて彼れは dainty に simple に full of grace なり併し彼の
性格は浮調にて力を欠けり。之をブラウニングと対照するときは面白
き対照を成す。ブラウニングは強力をもって描けども対して不明瞭と
なる。併し其性格を描かんとするの力は大なり。沙翁に

ひとり之みずべし されば一ワラウニッグ田から一代の作者ははなれんとして
言葉つきも面残りの半分を係るテニヲハの面一般の作と相せしもの
傳統あり それ是は既みにブラウニング翻具其及の律の気味あり
其所にはおもつかしい此二人の面の翻案されたかれ居るの気味あり
併ある人の國をかへ出[illegible]生前言于しき 文を保ちしは人の知る所
なり！

Robert Browning (1812、1889) はテニスンと同時代の詩人で
あまり世に喜ばれなかったので地位をば得なかったのです 彼れは一年許り London
大学に学んだがは在学した人ではない 自修したのです。始めの詩
は Pauline と題する無韻の長詩で 1833年に書いた、其の詩からして已に
彼の一代を通じた特色であるところの Strafford といふ思想の深く且急に流れると
ころから 動もすれば難渋不可解とせらるることは存して居ると申す。
彼は始めシェレーの感化を受けたが後はこれから離れ、独自の名を得して
出した詩集が1835年の Paracelsus で 戯曲時に於ける精神
が智識と力とを追うて向上する史ともいふべき詩であって喜と知、情と意との結合と
言はば哲学詩である 併し世には受けなかった、其の後凡年許りのるは歌劇と戯曲と
して戯曲に手を染めたが 併し舞台に成功はしなかった 1846年には同じく女
詩人 Elizabeth Barrett と婚して 夫れ Browning と夫婦好配の詩人夫婦となった

(68)

其後 [illegible] 1886 [illegible] も女性 [illegible] 一部 [illegible] て [illegible]

[illegible] 生時代の言にも [illegible] 其 [illegible]

[illegible] Sweet Day、1855年には Men and Women が出る 此の頃から彼の詩は
1850 Christmas Eve and Easter Day

やゝやく世に解せられる 読者を得るに至って、[illegible] 1864年

又は [illegible] Dramatis Personae が出る 1868年には The Ring and the Book と見え

する 夫の二万 [illegible] 余行に渉って居ると言はれる [illegible] があって [illegible] は

最後の作は純粋な事と Asolando で 伊太利で死にます、彼の思想は

予はテニズンと同じく懐疑に陥って一の信仰にあって楽観的であると許される

即ち其の好例は彼の Asolando の Epilogue の一節

No, at noonday in the bustle of man's worktime
Greet the unseen with a cheer!
Bid him forward, breast and back as either should be,

(69)

"Strive and thrive!" cry "Speed, — fight on, fare ever There as here!"

などは其の好からぬ形式に就ては或部分非常に lyrical 或は musical で或部分は句法の余りに乱暴なために意味不明瞭になることは破格は総じて斧鑿もあって Browning の一癖と言はれてゐる。概して言へば先づ詩がよい。例へば Christmas Eve や「Men and Women」の方がより詩があって、ブラウニング[illegible]とも言はれてゐる。然しながらどういふものか非常な少数の崇拝者と多数の嫌な人とがある詩人であって殊に Classical の学者を除いて、人には概して読まれない。又熱心な崇拝者は[illegible]一種の Browning Society を起して其の研究をやるやうな Browning 崇拝者を出すやうにした Browning Society とか云ふものがあって併し之が却って[illegible]感を引いて又 Browning の熱流も高まったのが近時やや平衡を得て、人々が崇拝は[illegible]人の地位を得てテニソンと並ぶべき人まで其の思想から人を引きつける魅力あること、少なくとも十九世紀詩壇では

(70)

さとを認めて、彼の詩は不可解であるとは云ふ名の事であるが其不可解は思想が
余りに早く[illegible]されなかったであるといふ説と技術の[illegible]為に割に[illegible]
(内容) が少なり (展開) からであるといふ説とある、セーンツベリーの
如きは後者で、従て彼の七扉は痛めた為一層よくなからうといって居る
(ブラウ) 二ングの詩中には love の[illegible]も中々真味なのがある なる彼の詩
は Philosophy / Art / love の (三で) まとめる(など)といふ人もある、
(参考)
~~此のは The Spectator~~
Mrs. Browning (1806-1861) は女流詩人として英国文学史中の第一人
であるのみならず一般外言ふも重要の地を占むべき詩人である。其詩の特色
は確かに婦人の真の感情を味はすといふ点にあるのである。殊に彼女の非常
な不幸苦が揮まれてあるといふのは其婦人の詩として最も有名な作である Sonnets
from the Portuguese の中ちょん佳篇が多い少女の優なる詩が 如

と言はれて居る。

此上の外にも前後に異つてゐる詩人 The Song of the Shirt 及 The Bridge of Sighs と云ふ有名な歌の作者 Thomas Hood (1799-1845) 又 Death's Jest Book の作者 Thomas Lovel Beddoes (1803-1849) 其他 Edward Fitzgerald (1809-1883)

~~其他　なとがあります~~ ~~James Thomson~~ などがあります

第二、抒情詩人

十九世紀は前にも言つた如く智識の此等を必要とした時代であり随つて宗一面或る信仰を持つて居る人は割合に情の方の深い人は叶はぬ情とは相容れぬ事物を感じて来る人生に対する煩悶は甚く深くなりて周りを取りまいて居るの方むしろ今の煩悶を帯びたる懐疑的、悲観的人生観に可情一層の考へんとするのは反抗の態度を取つて来て、此の抒情詩派といふのは即ち此の短きの方です。

(92)

此時代の古き停滞の傾向に抗して起つて居たのは Gospel Movement とでもいつ
可き宗教的復興の方面に起つて来た運動で文藝の方面では其の Pre-Raphaelites なども
即ちこれに相当したものであつて、此れは絵画彫刻を情緒的となすものとしてゐるのであります
すく同じくラファエル前派の思想を引いて居る人々で Pre-Raphaelites とこれを称して呼ばれます
の人々たちも之れに加へます 情緒的な其の傾向をいふので我々は前の方の芸術の
前のと区別せねばならぬ 宗派は分派的に競ひせる。
此の派の人の重もなるは ロゼチ、モーリス、スヰンバーン等にて代表とせます
Pre-Raphaelites の代表者は ~~[illegible]~~ Dante Gabriel Rossetti (1828-1882) 其の次の者に
と William Morris (1834-1896) とですと。此の派は絵画
上の革新運動を起さず持つであるので絵画の上のみならず Holman Hunt であるが
ありますが でありますか文芸の上を移つては右の二人の外に
もよい代表者です 其の調子は Swinburne とやらで ラファエル
以後の絵画は自然を遠ざかつてゐるが 人間的な様子で 我等は

(73)

は自然を自然のまゝに近世科学の助で写さう但し精神はラファエル以前即ち十三四世
紀の人の熱心でやらうといふのであるから半面近世の知識的傾向を宣言には掲げて
華やかなのであるが併し本元は矢張り自然を写すといふ点は全く写実で、[illegible]
的感情的の方が直接のものとなるのです、であるから一方にはこれ等の画には非常
に細かい写実の部分もある、かと思ふと又非常に非写実の所もある。即ち詩
の本色は後者に称しうるのである其のPre-Raphaelite Brotherhood の代表は
なる者である。それで此派の詩の特色は Shelley、Tennyson、Swinburne と違つてあ
る。精神の微妙なる点で此派も此点で同じ脈を引いてゐる。
ロゼチの父は伊太利の亡命の文人で其れが英国に逃げて来て帰化して英人となつた
のである。ロゼチは少年時代から展覧会に自分の画を出し又画家の
此派の機関雑誌で七つ出たが[illegible]をまし、之に於て詩をかいて
し詩作へ力を尽せば宜いのにかういふ[illegible]を作り直詩を集めて出さうと
妻を娶つたが死んで、失望落胆のあまり其生前の原稿を妻の柩へ入れて葬り

最初の

決して再び公にはせじと誓って倶し七年許の彼女人の柩中に葬りし
遂に之を掘り出して出版した（1870年の事なり）Poems 是が是れである
批評の酷しさか仁健康を害して夫れより〔?〕むしろ、Ballads and Sonnets が十
年余りも経って出て来て（1881）併し此頃から健康益々衰へ不眠症にかゝりて
魔薬睡剤を用ひておったが遂に不歸の人となって了った。彼の詩は色彩の
豊富な伊太利式の詩で一味の Sensuous な所の伊太利趣味を含んで居る
して居ると称せられる。又或は肉体的情緒的文藝を作っておると云はれる
実際は余りに古風で之れに累ひされて居る詩人である。其の他
作はテニスン、ブラウニングと同じくには惚れられぬ人であるが、一種の Charm を有して居なく
とも〔?〕二流以下にはおちぬ詩人と云ふておる。~~[illegible]~~ The Blessed
Damozel (Poems 中)の一節

The blessed damozel leaned out
From the gold bar of heaven;
Her eyes were deeper than the depths
Of waters stilled at even;

She had three lilies in her hand,
And the stars in her hair seven.

此等の句は其詩の風格の一斑を示すので此派の詩人の髯は甚しく余りに断捨に其人
し[illegible]詩人の見る[illegible]でせう　丁度今の日本の詩壇の一部が此派の詩調を
に似て来て居ませう　此印の為は尤も遠いてあるといふことを
マゼナつ朱　Christiana Georgiana [illegible] Rossetti も同派の詩人です

プレラファエリーツの一人 William Morris (1834-1896) はロゼチと同じく多能の人にて詩中の人なり。装飾美術の上にも一面を開きし人也。即ち壁紙硝子家具の意匠を改良せんとせしが詩中の人の経験は其内の室内装飾の最も高尚なるを一新しようと努めたり。又有名なる Kelmscott Press と云ふ印刷所を設けて古典籍を美しく出し世人の印刷物に対する趣味を喚起するに与つて効のありし人也。彼は夫のラスキンと同じく社会問題にも同情して其物を書いた。詩人としても偉に高い地位を占め居たり。其前作せるものは、1858年に出して The Defence of Guenevere and other Poems が初めで最も有名なるは 1868-1870 に出した The Earthly Paradise で是は Chaucer の Canterbury Tales に倣ひ其詩も随て其仏国にて聞ち多人数の旅行者が物語をする体で其趣向は北欧の人々が地上の楽園を逃れ求めて行く事ありし其人の作品は情熱に乏しく多少の抑鬱的が随て静平なるも中古的精神の

(77)

趣きある[illegible]然うである。

Algernon Charles Swinburne 氏（1837– ）はプリラファエリーツと交際せし

所は其他モリス其作品にも同様の調あれど一方には斯の人と

（新作家に於て[illegible]P.R.B.で[illegible]）

別派として詠みたる詩あり。又ずっと[illegible]プリラファエリーツとは云ひ難い

且つ[illegible]時代、テニスン、ブラウニングの二大家が出て居る

産せられたもので（[illegible]）英詩壇を率ゐて居る詩人である。オックスフォードで学んだ。但し学業は捗

時の英詩壇の最も名高い詩人である。

しなかつた。其の嫌な文章である。伊太利の独立に熱心した詩人

他の詩人と同じく革命的性質を以て居て伊太利に住つて居る

を見んで居つて、彼が其の年テニスンが死するや世は此詩人を其の後の Poet Laureate

と擬したが、[illegible]政治上の意見の為に其の事はなかつたのである

仏蘭西の[illegible]である。一体に此人は散文にも詩にも花やかな

文を書く思想の[illegible]にて[illegible]の其一[illegible]の集まりで

(78)

ある文[illegible]彼は批評家としての紀[illegible]中々鋭利で Matthew Arnoldの詩を
人の注目する[illegible]（まだ中の研究家で十九世紀の[illegible]）である。彼の初め出した詩は戯曲の
形をなして The Queen Mother 及 Rosamond の二篇で[illegible]年の事である之
は Chastelard [illegible]である。併し之は余り世に読まれなかったが
此作で已に彼の特色は残りなく見はれて居ると云ってもよし 故に[illegible]の
なお之を評したものである。1864年に戯曲として重な作に Atalanta in Calydon
が出て初めて彼の名は定まって、蓋し氏作中英文学史中最も重要
詩劇風の文で[illegible]作の多く有る中で最も成功[illegible]のもので
あるとは批評家も等しく[illegible] Shelleyの[illegible]
ずっと成功したものである。形式に於て希臘戯曲の[illegible]三通[illegible]
どの[illegible]して[illegible]甚だ精神[illegible]宗教的[illegible]
思ってもよい[illegible]
る[illegible]人は是非読むべき[illegible]
思想の精神を見る[illegible]

(79)

を捧げと許して[illegible]を捧ぐる[illegible]母の如く[illegible] メリーシアーしとす
母が其子は烟火の蝶を見るごとく[illegible]との運命となり居るを忘れ
姫を焼かしめて[illegible]メリーシアーが[illegible]と言ふ[illegible]を捧げ人あれ[illegible]
[illegible]を発せし故、母怒つて烟火を消すメリーシアー即時死すとなる
節ありて此の伝説を取れるにて此作は[illegible]上
出来ておりしのみならず其の抒情的の如きものは極めて豊富なり此
の[illegible]の評判となりたり、1866年には[illegible]
Ballads が出て之が為め[illegible]詩もまたが[illegible]其 Poems
の[illegible] sensual な excessive なる所が[illegible]一世の物議となりて[illegible]
の批難を呼んで醜悪となし Swinburne は之が[illegible]
Notes on Poems and Reviews をあらはして[illegible]弁駁を試
みて、此集の中二は1866年之は1869年の作なり
又彼の戯曲の作ではクヰーン・メーリーを作つて三曲続きの大
作 Chastelard (1865) Bothwell (1874)

(80)

Mary Stuart (1881) などあるが[illegible]名高[illegible]

之等よりも[illegible]詩として1878年の "Ave atque Vale" がある

アタランタと共に並びて彼の一代を代表するのみならず批評家によつては

寧ろ彼の代表作とするものもある。之は仏国の詩人 Charles

Baudelaire の死を悼んだ哀詩で Shelley の Adonais

Tennyson の In Memoriam と対峙して英文学中最大哀詩の[illegible]

一つである。併し此の詩をとつて見ると到底テニスン程の深みは

遂に哀詩の意の新しさはテニスンの外何人も之を[illegible]するものの如

まずない如き味を挙げてみる。其一節

Sleep; and if life was bitter to thee, pardon,
If sweet, give thanks; thou hast no more to live;
And to give thanks is good, and to forgive.
Out of the mystic and mournful garden
Where all day through thine hands in barren braid
Wove the sick flowers of secrecy and shade,
Green buds of sorrow and sin, and remnants gray,

(81)

Sweet-smelling, pale with poison, sanguine-hearted,
Passion that sprang from sleep and thoughts that started,
Shall death not bring us all as thee one day
Among the days departed?

此句をよく此人の詩想を見はして居るのである。詩句のmusicは申すに及ばず美しい形容などを惜気もなく[illegible]する abundanceといふ事は此人の[illegible]にも通じた[illegible]の特色でもある。其[illegible]なども此もすべて彼が長じて居る所である。[illegible]とか[illegible]とかいふ要素二つも三つも同時に[illegible]みおいて来て結合するもよく[illegible]な[illegible]では[illegible]所にて上の如き[illegible]の形容などに至れば見るべきである。又思想の上では此[illegible]詩想を通じてテニスン、ブラウニングなどの如く問題意識の如きに立ち入る[illegible]事は決してあるまい態度をとらない。之は前にも言つて即ちテニスン、ブラウニングの二家と袂を別つた所で、テニスン、ブラウニングの二家の如きの態度は[illegible]區々たる[illegible]あとに此等の詩人の残した[illegible]を見るならば或は此等の[illegible]能力であるが[illegible]何か思はれ[illegible]人生全體の

覚悟の上から言へば更にあきらかなる所で[illegible]ブラウ
ニングから言へば一層高いのかも知れぬ。即ち之れ世界人の言ひ語ひは天才
許す隠蔽、芸術の皆のみならず其の者がすみやかに
謳ひませう。然しいと言をかへていふまでもなく、其の上に解決ぐさい
深なる言ひ備への語で表現せず[illegible]上に引いて語句は即ち
よく之れを見ばしてゐます。アーノルド等の如く知識の指導に
はならぬも言ひ換へて端を発しては現世に対する希望、目果、[illegible]
備へ入言しまする味はなきせう。此人は[illegible]私物しきで
とて、其の脈の発達の抒情的な詩をなすのは何なりや。又或種詩歌は
此人の餘裕やはり此の只、只、只と同じく[illegible]詞華言葉為
此人を眺めせずして具みなしく新しい言葉を言へと言ふ
甘ならての只、只、只組の[illegible]經比ひ。筆意之話ひ
音楽と絵とを立かせ見せ目やうしてもまたの話ひあるとして

續き

(83)

予ゝ文政々ニマンネリズムに見えて紀昌カ とせられるから模倣的な体
随分多く出たが何れも紀昌の（ゝゝ古の漢大的豊麗華飾の体）骨を真似て醜いとしたれ了。

(84)

次に同じ新浪漫派に属するものとしては認め得べき Romanticism を代表すべき

~~O'~~ O'Shaughnessy (1844–1881) があります 是れは前来

Arthur 〔稍〕の詩人ほど小さい名になつて居ます ~~世評判が[illegible]~~

アイルランド血統の人で British Museum の館員であつて、其の詩は

ラファエル前派などの dreamy な詩を更に一層進めて行つた人といはれて

又其の詩は其の神秘的なるものに[illegible]の影があると[illegible]又其の情緒は[illegible]

~~[illegible]~~ 音楽の耳を以て詩を作らうと試みた人である

其の作では〔詩集あるいは〕[illegible]等あるが Music and Moonlight などは集中である The Epic of Women 及び Songs of a Worker

とか A Neglected Heart とか The Fountain of Tears とか 前者の中には Exile

(85)

み緑なりしは Once in a hundred years とか Has summer come
without the rose などの句ひおもいて喉を如を流れて
ラファエル前派などと同じく一種の charm を持てる Ode の中で久年の
一回節を詳せば

We are the music-makers,
And we are the dreamers of dreams,
Wandering by lone sea-breakers,
And sitting by desolate streams;
World-losers and world-forsakers,
On whom the pale moon gleams:
Yet we are the movers and shakers
Of the world forever, it seems.

第三 知識派

テニスン、ブラウニング等のと同じく知識真理の追求をも詩人の務とはしたれ

(86)

のみならずむしろ此一団に縛られて詩人と目せられる一派の人々を此部に属せし
めた。即ち其の代表は Matthew Arnold と Arthur Hugh Clough 等で
今、
せう。然しアーノルドは其の代表分とせう
Matthew Arnold (1822—1888) はオックスフォード大学に学びまし
(詩を作ると共に) 大学に[illegible]教授を勤めて、[illegible]を成して居るのは其の批評の方面で、之れ
(後に[illegible]と共に) では批評に十九世紀の終末を飾る人ですが、詩人としても重要の地位を
持つて居る。批評家としての方面は批評の歴史の方に譲つて置いて彼を
詩人として見た重大の地位を占めて居ると批評した此は前にもなく[illegible]
バーンとなさるをなめます。詩集は第一が1849年の The Strayed Reveller
and other Poems で 第二は[illegible]年の [illegible] Poems 此[illegible] 1852年の [illegible]
Empedocles on Etna (and other Poems) 1853年の New Poems 等であり 其他 Greek Drama
なも試みてゐるが之は成功しなかつて、此内第一第二は[illegible]何れも早くに

(第三が1853年の Poems で)

(87)

ち乃もの文学者として出しても作品は世評を顧ず作品のみから研究するの

を途中止させ又第二も出て五十部と売れない中に同じく発売を停め

させとを中止めさせとうとう第三の Poems に至って三名大詩論の序

がついて、其詩の縁一主張を述べて即ち其敢然のせしめたかと

いはる一例である 此集中には Sohrab and Rustum も子の分量であて[illegible]

~~脚の材を求めたるもの~~ Rustum が子を云ふと知らずして之と闘て殺すところ[illegible]上話

の材でアーノルドの悲哀[illegible]の一面が見えて居ると[illegible]なので[illegible]文学

之興味なのは [illegible] で之は最後の作品を収めて寄[illegible]詩人

Clough の死を悼んで哀詩で Shelley の哀詩 Adonais と比較せられる

又或は[illegible]此二者をも前言の三大哀詩に加へて五大哀詩とテニソンのイムメモリアム。

シェレーのアドーネース。スヰンバーンの~~ボードレール~~エーヴ、アトクエール

とは二を[illegible]である 由来アーノルドは十九世紀の[illegible]その一つ[illegible]知識

(88)

あゝ Unrest と苦悶 人生の声を代表するよし全局はれ[illegible]

Melancholy, Pessimism を[illegible]の其の思想を[illegible]

句は其の全集中に在る Dover Beach と題する詩中あり[illegible]

The sea of faith
Was once, too, at the full, and round earth's shore
Lay like the folds of a bright girdle furl'd.
But now I only hear
Its melancholy, long, withdrawing roar,
Retreating, to the breath
Of the night-wind, down the vast edges drear
And naked shingles of the world.

然るに彼は批評家として実に大なる地位を占めて[illegible]

[illegible]大をなしたる[illegible]

Stedman は アーノルドの氏を[illegible]批評と詩と両者[illegible]

傳說を讀了せる事あるので有る但し古來此の例は屢々ある。Goetheに就て
Landorに就てColeridgeに就て然うしてあるを知って居る、又アーノルドは Wordsworth
に深く私淑して此に至る其な撰集あるとは前にも言ったが併し遂にワーヅワース
の偏した所の中に[illegible]自然の懐に安らかな味地をば得なか
つたと評せられる。
Matthew Arnold Clough（1819–1861）は右で言ったアーノルドのサーズス
の主人公となる人でアーノルドの學生であった人、[illegible]永く
世に認められぬ[illegible]詩人である、其詩アー
ノルドよりは低いが、併し[illegible]ては[illegible]
位には[illegible]地位をあてられて居る、アーノルドと同じく懐疑の[illegible]
信仰の[illegible]の[illegible]遂退して[illegible]人であって[illegible]又此人は[illegible]
稍の才にも富んで居る[illegible]な詩は[illegible]
[illegible]（1848）である、下には The Existence of God とて

詩の中の一二句は世の人の思想を調子よく代表せし見本なるべし

Some others, also, to themselves,
Who scarce so much as doubt it,
Think there is none, when they are well,
And do not think about it.
. . . .
And almost every one when age,
Disease or sorrows strike him,
Inclines to think there is a God,
Or something very like Him.

に言ふ外或は現在生存し或は已に死せる詩人にしてヴィクトリア、イーラに属する者の多し、由来詩人の称を第十九世紀文学界に於て詩人を輩出するも猶之をなししはスヰンバーン始めの流行は之に伴ひ衰頽せし詩たるにあらず少なからず少なし James Thomson (1834、1882) は詩人として The City of Dreadful Night は其の傑作として存る。

Robert Buchanan.

(91)

（1841－1891）は London Poems などの作品あり けれど（は大の Dante Rossetti 及 Swinburne を攻撃しロゼチ及んの罪過を
等と激評して有名なるもの也 其他小説家で有名の George
Meredith（1828－）も又詩集数冊あり 同じく
Thomas Hardy（1840－）も詩あり Robert Louis Stevenson（1850－1892）も又詩
あまり世評高しく無くして是亦の人には Theodore Watts-Dunton（1832－）
Henry Austin Dobson（1840－） Andrew Lang（1844－）有名なる詩人
其の他。Edwin Arnold（1832－1904）は Edmund Gosse（1849－）
The Light of Asia なる仏陀を詠じて居る有名なる詩人である。作者
は彼は同じく東洋を愛し 日本婦人を娶りて居る
評である。日本人の妻君と同棲して晩年は眼を患いて居る人
一昨年世の人となり Alfred Austin（1835－）は テニスンの後を襲ぎ

1892年 此Poet Laureate ハなかなか大で…名あり テニスンの後を継ぐ者
人ではなかつたが政治上の手続などからスヰンバーンを斥け選んだ
なかなか人に悪れも言はれ人で世間テニスンと名前もにあるがAlfredと
なので、テニスンをAlfred the first 又はAlfred the Great と云ひ此人を
Alfred the Second 又はAlfred the Little Austin 卿 20[illegible] せられる。戯曲ち
どの作もあるが詩としてはThe Human Tragedy [illegible] なども傑作と
称せらる 又未来に Lyrical に Graceful なものを好むやうに思はる
~~[illegible]~~ 短い A Night in June などを以てたし特色のとする (叙景などを情景と)
ちある風一節

Moonlight! into other skies,
I beseech thee wander.
Cruel, thou to mock mine eyes,
Idle thanks to squander

Love's own light on the dark spot;—
For my lady cometh not!

此人の初作Randolphは Poland に同感して露西亜を悪むの作である [illegible] とてブルワリットン式の小説もやつて居るが言ふに足らぬ
The Season, a Satire とて評判頗る宜しく世の評判を得たるは此人の作 The Poetry of the Period と題するものである。して テニソン、ブラウニング、アーノルド、スヰンバーン等を歴評して其の世 此人は又雑誌記者として評論し、ブラウニングなどとも論戦したることあり。

近頃又ヴィクトリア朝を了へ且近くは現在即ちエドワード朝より二三の重なる詩人を取出し一言して詩の歴史を了へつゝある、

（今はワトソン、キプリング、フィリップス、イーツ）

(94)

エドワード・デヰアン、イーラ（現在）

茲には已に名を成した若手詩人の二三を取り出して置きます。其中に来るのが非常に有名なのも William Watson（ワトソン）でせう。此の人は併し詩人としての才色とよりはむしろすぐれた完璧であるらしい。けれども今一寸の傾向ではやはり モーリスやアーノルド等の静な思想の勝つた式の詩を行く人らしい。始めて名を成した作は1890年に出した Wordsworth's Grave で、其二回目の有名な作の一つであります。1892年十二月の死でテニソン作られた挽詩 Lachrymae Musarum も名高いものの一つであるが、長くはありませぬ。近時の挽詩の中でも新しいものの一つです。静な詩の調子の一例として次は右のワーヅワースの墓の一節

What hadst thou that could make so large amends
For all thou hadst not and thy peers possessed,
Motion and fire, swift means to radiant ends?—
Thou hadst, for weary feet, the gift of rest.

(95)

From Shelley's dazzling glow or thunderous haze,
From Byron's tempest-anger, tempest-mirth,
Men turned to thee and found — not blast and blaze,
Tumult of tottering heavens, but peace on earth.
Nor peace that grows by Lethe, scentless flower,
There in white languors to decline and cease;
But peace whose names are also rapture, power,
Clear sight, and love: for these are parts of peace.

見ゆ所謂近代の詩壇で最も注目せられて居る人です
此には Rudyard Kipling (1865—) 此の人の名は早くから日本にも
聞こえて[illegible]小説家としてもよく知られて居る [illegible]
東西人[illegible]に来て作の傑作が大いに[illegible] 詩作の中で一番初め出来たのは Depart-
mental Ditties で 1886年に出版したもので 1892年の Barrack-room
Ballads 及び 1896年の The Seven Seas それから最近のは 1903の The Five Nations

(96)

でせう、Barrack-Room Ballads と Seven Seas とは人によりて好悪も違ふて
みるが先づ傑作なる詩集である、丈けの人の作は急な、
曲折のある、調の強い、動きもれ粗硬な調子、落ちる、併しながら響
のある Original な調子である、テニスン式、スヰンバーン式乃至ラファエル前派
式の美しい調子に馴れた我々の読詩界に一時に耳を驚かせたのも一つは
けの[illegible]用兵らしい強い響が[illegible]らしく感ぜられたからでせう、又其の
題材も[illegible]好んで其の地名情言なども取り入れてある又好んで即
ち居る兵士の情懐を詩にも小説にも読み込んで居て其の詩は概
して東洋殖民地を集めの意となる、けれども尤も最もよく見はし
たものがバーラックルームバラッドで、又セヴン、シーズで
於ては[illegible]小なけの祖国を策する情から一歩を進めて所謂
の Imperialism の流行とか、British Empire を称する至って、

(97)

（詩）バーラック・ルーム・バラッヅの一節で最もよく右の趣を代表するは Mandalay の一節の如きであらう

By the old Moulmein Pagoda lookin' eastward to the sea
There's a Burmah girl a settin', and I know she thinks o' me;
For the wind is in the palm-trees, and the temple-bells they say:
"Come you back, you British soldier; come you back to Mandalay!"
Come you back to Mandalay,
Where the old Flotilla lay:
Can't you 'ear their paddles chunkin' from Rangoon to Mandalay?
On the road to Mandalay,
Where the flyin'-fishes play,
An' the dawn comes up like thunder outer China 'crost the Bay!

此の集は五万部を売り尽して近時に稀な詩集の売行きを[illegible]
くらいのびやかな、音楽にも歌にもせられて人気あるものである。一方からは此の個
子が倍であること[illegible]帝国主義[illegible]思想に[illegible]機軸[illegible]ては
[illegible]の中でも[illegible]

(98)

Englishの愛国詩として称された人の英詩で読まれた事

a... Mothers be proud of thy seed —
Count, are we feeble or few?
Hear, is our speech so rude?
Look, are we poor in the land?
Judge, are we men of ~~the~~ The Blood?"

今は㊀ Stephen Phillips (18/68) 是れは前に詩集も出したが近頃[illegible]戯曲で近頃から名を上げて居る人で[illegible]1899年にPaolo and Francesca 1900年にHerod 1902年にUlyssesが出て帝国劇場で演ぜられた[illegible]なかんづく就中Ulyssesが上出来といはれるが併㊀Herodも Paoloも好い作と世評に高い

William Butler Yeats (1865/8 /) は愛蘭土の詩人

で1889年にPoemsを出したけ人なる詩文をのみある[illegible]何しけ人の最も
初め[illegible]なるは其のGaelic revival 即ちIreland文学の復興とゆふ[illegible]さとし
彼の同じく愛蘭の劇作家のBernard Shawなどしけの運動を起って
ゐて愛蘭土は何の時代にも十分にあって其のCelticの最高の復興をと
いふもある文字も此処まで達成して国家するに愛蘭の精神
思想を部分する中なる[illegible]を唱へて居る[illegible]偏し國之は何の成功しの
は居らぬ。念に角愛蘭土詩人として名ある人であるが[illegible]
い。又[illegible]の詩風の最も[illegible]もので甚た。

近世英文學史

ましこのが 1814年

[illegible] 大な

置くが為めある

[illegible]

を史家の

Macaulay など

[illegible] 代的

の The

大成せる

[illegible]

十九世紀の英小説

スコット以前の小説

Walter Scott が始めて小説を持して Waverley Novel を出したのが 1814年

である。さては前に該の時に言って了って十九世紀に於ける大な

る小説の始めをスコットとすれば其の前を一括して見て置く必要がある

小説とよばれるものの Novel の英吉利に於ける初期は十八世紀に於ける

Samuel Richardson の Pamela (1740) などにあるとも史家の云ふ

かしとすれば此らでは Fielding / Smollett / Sterne / Goldsmith など

なるが来て此等は凡て私しろ写実的乃至は現代的

のものと云ふ点であるが、1764年に於て Horace Walpole の The

Castle of Otranto なる作が終にスコットにおける大成せる

此れ中古国ローマンチックの小説の先駆とされ了ふ（それの色々ほて

みる、是れらがおのづからロマンチシズムの萌芽と見られる。又他方には夫れで十八世紀の終り近かに於ては Walpole が起つて、非常の驚怪なる悪人などを描くと共に之れを読むもの自然的なる更に進んでは超自然的の恐怖と不可思議なる所を研究して来ようとする。夫のコールリッヂのエーンセントマリナーの初版（の開巻）に見えた悪人の形容などは皆同じ脈を引いて居る。Mrs. Radcliffe (1764–1823) の Mysteries of Udolpho (1794) の如き作り例で或は Lewis Villain を作って恐怖戦慄を興味の中心としたものである。

（小説復活）

There was something terrible in the air, something almost superhuman. His cowl, too, as it threw a shade over the livid paleness of his face, increased its severe character, and gave an effect to his large melancholy eyes which approached to horror ...... An habitual gloom and austerity prevailed over the deep lines

(102) {裏書き}

of his countenance, and his eyes were so piercing that they seemed to penetrate, at a single glance, into the hearts of men and to read their most secret thoughts.

なるものが其の調子である。此の様な風の其他 Matthew Gregory Lewis は Lewis (1775–1818) は "Monk" 又 Lewis と呼ばれて 1795 年に Ambrosio, or the Monk を作って名あげの作なす又遂に於ての Sturm und Drang の影響を感得した幽霊傍らが書いて居る。又 Charles Robert Maturin (1782–1824) は 1820 年の Melmoth the Wanderer なども名なり 又 Mrs. Shelley (1798–1851) のは Frankenstein (1817) も名なり。彼女は即ち詩人 Shelley の妻君なり。

其の他之を小説の中に完すに至る purpose novel 或は tendency novel の祖と見て大なる者 William Godwin (1756–1836) の Caleb Williams (The Adventures of) (1794) である。[illegible]

斯くロマンチックの要素の芽ばえ小説と云ふもの傳はりたる後の作固有の前世紀もなく
備せて家庭的平凡なる写実的の方面も亦之を欠かず何は吾等にも[illegible]女作
家を生じ Jane ~~[illegible]~~ Austen (1775–1817) Maria Edgeworth (1767–1849)
Susan Ferrier (1782–1854) 是なり。オーステンは英土を代表し エヂワース
はアイルランドを代表しフェリアーは蘇格蘭土を代表せる者に包含し作も皆
其平[illegible]和の家庭的世界を舞台として写実以外に出でず
ファーエ三人の中(最も偉大なる作家の)でもオーステンは最とせられるる
にあらゆる ~~[illegible]~~ Pride and Prejudice 乃至 Sense and Sensibility など初期の作が
悉く作者中の[illegible]なるもはや見出さざるべし、前者は[illegible]若き男女が[illegible]
回を経てなかなかもれ[illegible]事すらにて[illegible]に至る経過を描き
後者は二女の一は理性[illegible]他は感情[illegible]を[illegible]ある[illegible]
なるものにて、エッヂオースではCastle Rackrent 及び Belinda など最も代
表的なものである、前者は紳士が零落しゆく経過を描き
たるもの、後者は[illegible]婦人の女権論者[illegible]、女[illegible]を常とし
たるものとして[illegible]
其外[illegible]に[illegible]フェリアーに[illegible]の[illegible]

スコット ウヰヾには其時代に "a general review of the domestic and unrecorded despotism" を為して[illegible]
[illegible]

(104)

で、要するにスコットランドの現在を捨てスコットの其の過去を描けると好一対の好照をなして居るものである。

スコット

スコットの詩人としての生涯は此前に述べたが、彼は詩人としてよりも寧ろ小説家として偉大なる名を残して居る。殊に其の書いた歴史小説に一気あり[illegible]、而も混乱なく[illegible]読んで心地よく感ずる一種のチャームを具する。[illegible]は古今の[illegible]文学の[illegible]であろう。之が言葉なる批判をいえば[illegible]、其の評も[illegible]文学も[illegible]であるが、併し其の結構、[illegible]、冒険、叙景、[illegible]なる描写の[illegible]、文章の[illegible]、目的[illegible]一種の快き響を与える、全編に一つ[illegible]ユーモア、ペーソスの調子を帯び、読者を引きつける力であろう、其の[illegible]されける作[illegible]長くなる[illegible]利口にも見出して引出の中から旧稿を取り出し二週間[illegible]書き上げて完成とし、其れから[illegible]年の[illegible]で一年にして[illegible]出した、併し是は[illegible]出しての[illegible]一二年の間に[illegible]二十[illegible]部で作出した一篇一篇より[illegible]

(105)

帰を慕しながら、遥に憬れる心を描けた、Ivanhoe の Waverley と云ふ彼の作
世々にして romance と云ふものが出来る様に作って、此のウェーヴレー
は始め若い頃から書いた人の作品を見せるのであるが、つまりは之をまとめてゐるのです
また之を書いたのであってもよい、然も十八世紀末のスコットランド生活を新しく描いて
romance の戦争的冒険な此種の事件（ゴシックと舞台の事件を加へて）
とれ始めたとは限るのであるが、複雑な事で事件、悲劇、喜劇さまざまの感情
出来ることを結び合はせてある、由来スコットの作品の中には其の
記録的な戦争を劇化した点であるので、ローマにある古の歴史的事実の話
へワーヴワース、ブールリッジ（struck-out word）などと同じではないが、併し彼
のローマンチシズムの然ては、彼はむしろ精選して意味を持ってゐると云ふ人
もあるといふ事が来ってゐる事を云ふ所に小説とスコットの作、等を中心とする
小説とは作品として西国に尊ってゐるのであるが（むしろ）の例子
中古英国及至近世文芸に至る迄は歴史小説の自然の結果として云はれる
れども、ローマンチシズムの芸術なる叙事的なる結局とする伝統となる
は或彼の外はあまり用ゐず、全体の調子がむしろ平凡な客観的な写実
と云ふ気味ではなかったのである、之も一理ある見方と思はれる

けれども事実の伸す文学と相もかくも運び込まれて、小説の方の活動も
することは只一味を脱しないものであらう、すれば今日の小説
と云ふ範囲内で、他の性格の理解を定めし現実の描写を主とす
るものと違ふことは彼等の方からの主張でなくてはならぬ、
荒し言葉の上に区別を与へたら、一層はっきりした[illegible]のローマンスが出て来ると
記事が写実的であるのが[illegible]のロマンチシズムを[illegible]
彼れの描写法であるのは[illegible]と思はれる。[illegible]の語であらう、そして彼等は其中に
我の世界であって[illegible]の大成[illegible]であるが、従って其の全き[illegible]の一大
[illegible]十五万円の収入あるものとして[illegible]
[illegible]の地をトして一大壮麗なる家を構へ同様なもの[illegible]
例の 只名な建築家の作つて[illegible]
派の豪奢に流れるのを批難して[illegible]
[illegible]、建築する件と云ふ[illegible]
から商業上の[illegible]パラレル[illegible]
百十七四万円許りの費用を掛けて[illegible]

(りある京都の(ロけ)

上に右の五十七万円を排はねばならぬ。すんなりくけれ程て誘ふ
用ふ田畑極して見て之を拂ひかくく守て遂に七十万円までは之を
失ぬまでせつせと走りて節抑しく保し遂にけの方に儲蓄を害つて、
死んでのぢき、古来の之は右の保祀も寺院とすべきはけのすでも
ある、右の維持費千八百円を寺で、其の年工費廿ヶ
でエコノトのあに大会が守られ其席で、初めて出蔵ウエーバーし、ノエルトの作
古は我れならと、素晴しるのである、空しかし、ノエルエとは彼
小の代の名である。即しこから後の彼の色極は右にも古くこれく
出し出しムスクのであつく、花デーテから出を遂って其の作を書しこのはけの
伝である けの論に後の作に伝してけの時標ちも姪の影が悟わつと
遂ひては其しいると拝み出して、エコノトの作は右のかく Brahms で
古きから数十年のるがみ出して居る。我々は之を時代の影け時代に之を萬華蘭
二十年しる実機編きる年しるの、大陸の平しるのと申せる事の万円
あがめなく、最も見るかなんのでは Brahms (かり)は元エコノトフエトの
あの畑れ地方が世界の見るかなく生ず作、
Brahms (ダ(ヨ)は七ふ万一

(108)

の傑作で（じまく第一の好評を博したもの）あるアイヴァンホーの或意味の男性的で其描き出しの一字な

も最も人のよく論ずる所もで特色あつて事、此作は多く此中の英雄

士を崇めるにして作であるはロマンドをロマンションを起こすことを作であり

スコットには飽きたらずの趣があつて、例は此作は乃ち其の~~[illegible]~~

~~[illegible]~~は国々にロマンセンセーションを起すことなきである、

Quentin Durward (1823)は北方の大陸に事を取る（ルイ十一世の事）

作で　其他 The Fair Maid of Perth (1828)も面白いが殊に

其の戦で小説も或は評判よかつた作で又 Guy Mannering (1815)

The Bride of Lammermoor (1819) ~~[illegible]~~ Kenilworth (1821)いづれも佳作と

称せらる事実するに後の作には如何しても年代の前後により或は

佳作を劣等と評されてある、（と拙作とか交つて）

外に Woodstock (1826)は内乱時代に出来た作であるもの、ニ

にある Waverley の総称が Waverley Novels の作者［冒頭］の名

の由来は此作の出たことの始であつて

(109)

デッケンス、サッカレー前後の小説

スコットを更にして十九世紀第一期の作家とすれば、次のは十九世紀の真中頃を数へデッケンス、サッカレー時代を第二期と見られる。此の期では又上及えたローマンチックの方面が漸く退いて、写実的乃至、諷刺の調子が多くより多く這入つて来ると、同時に歴史的よりも現世活的で、歴史物でもスコット流は少なくなつて来るのである。此等の傾向を代表した二面から代表しようとすると即ちデッケンスとサッカレーで甚だ併し此の両氏に至るまで乃至は両氏と同時代の人で両氏程に重要ならざる作家を占めて居るものがある、其の主なるを数へて数へ上げると、先づ Edward Bulwer Lytton 即ち後の Lord Lytton (1803—1873) リットンとヂスレリー(ヂスレーリ)等である。

……で最も優れし文章の方面が重要である、彼の小説は何でも書いて送つて、而して時代とも通俗に来て生前は非常の人気があつた、長の其の作風は多くスコット風乃至其の全体の要素……

興味の中心とする作風に比して[illegible]色白く流る
せる作風である。これは最も[illegible]後の[illegible]、[illegible]を[illegible]無し
主ろ前のスコットを[illegible]の思ふものといふ[illegible]其作中には
The Last Days of Pompeii (1834) [illegible] Rienzi (1835)
などは人のよく知る小説で、[illegible]は最も[illegible]である。[illegible] The
Lady of Lyons (1838) の[illegible]時の印象[illegible]
併出る作品である、リットンとはすぐ[illegible]
Benjamin Disraeli, Earl of Beaconsfield (1804–1881) で[illegible]
政治家としての地位が高いのでその小説中には[illegible]
の腕を引いて[illegible]の[illegible]
[illegible]と同じく[illegible]の腕を見る[illegible]
Sybil 又は The Two Nations (1845) 又は Coningsby 又は The New Generation (1844)
の二作は当時の政界問題をとり扱ってゐるので、前者は即ち[illegible]
問題[illegible]後者は[illegible]のことを述べたものといふべし。[illegible]

(111)

是等が又は重大の他作を指てみるといへぬのは勿論であるがリットンに於ては其の表面的才識に於いて一味天才的の輝きを缺いて居るのが大欠点である。ヂスレリーでは性的と同じく動もすると真實Sincerityに缺けて居ると評せられる。又其の作品が多くは表面的である点は、ヂスレリーと同じである。次に此れに對して著しく出た二小説家は海陸軍事小説ともいふべきもので名家で

の Frederick Marryat (1792〜1848) これは Marryats と呼ぶもの即ち海軍生活を材料とせるので名を得、其の小説は何れも一種の趣を有する作家である Peter Simple (1833) Jacob Faithful (1834) などが名作である

次に、又之と對して陸軍生活を描いて名をなしたのは Charles Lever (1806-1872) で Harry Lorrequer (1837) Charles O'Malley (1840) Tom Burke of Ours (1844) などが其の代表作である。

其の他スコットの模倣者として名を成した者の内には ~~[illegible]~~ Harrison

Ainsworth (1805–1882) と G.P.R. James (1801–1860) とが有名な
前者は "Tower of London" "Old St. Paul's" 等が有名。後者は "Richelieu" "Mary
of Burgundy" 等が書。其の他に ~~Headlong~~ Thomas Love Peacock (1785–1866)
は fantastic satirical といふ様な筆で "Headlong Hall" "Crotchet Castle"
等の作あり George Borrow (1803–1881) は Gipsy Novelist と呼ばれ
ジプシー生活の悍略なるなどを得意に写す "Lavengro" "The
Romany Rye" など代表的の作である 其他 Theodore Hook (1788–1841) John Galt (1779–1839) などの名もある。
これ等の諸作家を背景として出て来るのがディッケンスとサッカレーで
ある。

ディッケンスとサッカレー

(113)

（りあみ裏

Charles Dickens (1812–1870) は貧困の為に自修して達した人で、其の作 David Copperfield は一部彼が少時の自伝とも云はれる。即ち此の作中の Sam[illegible] はやがて此の人の幼少時の面影とも見るべきものである。

ところが彼は倫敦で育って終年小説の材を之に限って之を写して倫敦通の知識は此の上ない程くのである。彼は新聞の速記者として [illegible] Chronicle 記者の探訪に従事して此の方の事を得たは非常に興味あるものとして記者の特別の事などを取り扱って其の作の中に此の様な事を書いて居るけることとか此の様な事を采み入れて居ることは後年の作品に表はれて居る。之れを回顧して言って来て承知して知らる。

1836 年に始めて彼が著したを二冊の小冊子に纏めて出版したが Sketches by Boz で直ちに好評を博したので此の書の版権を初めは千五百円で売ったが余り売れるので二年目に再び二万円出して買い戻したといふことである。[illegible] しくのが Pickwick Papers で是れで彼の文名は全く定まる

父は海軍の会計官吏であつたが元来貧困し一時は負債の為に
入獄した、後年に Little Dorrit に牢獄をまいて経験などよく描写
又を読書こと不足殆んど無かつた氏は後こんなにもあつた、十二才の頃は
年少の頃を偏執の時でして夜は僅二三のペン食商を務め好ました
をした、すぐ父が放免されて後 Morning Herald 新聞の探訪となつたので
自分も直職を捨てんと思ひ立て速記を自修しこのでも又時に
Bentley's Miscellany に出入して読者の方をも励くが ~~[illegible]~~
~~[illegible]~~ が記者上に言ふてめく新聞社の探訪記事となつて

(114)

のであるが（次を書いた作品の）後代の作の筆ならぬのを列記すれば
The Posthumous Papers of the Pickwick Club (1837) Oliver Twist (1838) Nicholas Nickleby (1839) The Old Curiosity Shop (1841) Barnaby Rudge (1841) The Christmas Tales (1843–1848) David Copperfield (1849–50) Bleak House (1853) Little Dorrit (1857) A Tale of Two Cities (1859)

この年は甚だ健なりしので彼はのが外に出ずして何時も遊ばれ
晩の模子まで時候して頃、而して1870年最後の作たる
の Edwin Drood を作りかけてまゝ死去して Westminster Abbey に
葬られた。彼は才あり力あり前後二回米国に渡りして前には American
Notes を出し後には自作を携えて行つて朗読をやつて回つた。又伊太利に
の新聞に（特派員として）も旅行して Pictures from Italy を出した

(115)

humour, warmheartedness, delightfulness, pathos, and ~~sympathy~~ characterisation realistic and

つなへて陸東見せる

いくら文学は前後二つの雑誌を主宰にも携はって Household Words と

其のあとは All the Year Round 丈が最もであって彼れが畢生の

一気を博し又人々も革命の小説等他に数多の好著を著はせり 又 彼れ

描く地を見ても彼は何細微の特色があるかどうか

の多種の短所が多く其長所最大の小説家の一人である一方 所 便ち近時

多許すものあるが要するに其の humour ―

delightfulness ― characterisation ― pathos ― sympathy ― warmheartedness ― knowledge

for lower class realistic

[illegible]は既かで 比小説の鳥もスコット式の小説あるとすれから

ざる読み物であるのを、丁度スコット式の小説の如く能われぬく

而る際に於して居る時に世間を作つてのびもあるの文 delight humour ―

然も ― warmheartedness なども云ふものは我を味で其の気味の粘

(margin) Sympathy for lower class

(margin) warmheartedness ― [illegible]

粋でもある点に強く甚だ人に好悪を分かる理由もある、併し彼れの能にては
専ら其のhumourの子供中心となりて不具の人物の多いことと即ち彼の描く
人物は概して humourの 権化の如き観あることと又其の事を叙すに務
強いて流れ出る像の色多く西にまかす意味あることと又哲理的の深奥
と云ふ真面目の味に乏しいことを言ふてあらう、即ち彼れの最後の重
件の如きは或はボッチ先の如き作風には非難すべき遊かも知れぬが、更
以前氏は近代の人から不足に思ふ一つもある又前紀の二件も總べては
真面の人生に觸れることを妨げる者となって、不得足となる又
極端の一径の趣他を圧倒するにあるに至るのであらう 又彼が好みは
David Copperfield を最愛しこととなすが最も特色的なのは正しく
Pickwick Papers などであらう 又 Christmas Tales にも彼れの特色は
よく見ればあるが バーナビー、ロッヂとツーシチースとは彼の代

(117)

みな歴史小説である故城口とはいはれぬ。又彼の作で写実的で[illegible]
あるものは矢張り風景野良の助けをなしてゐると言はれてゐるのは前云つた
Little Dorrit の牢屋を描いてある牢屋の中の静風が近くより
Nicholas Nickleby で学校の集会が近みなどもしたとて語
ひある

(118)

前回ディッケンスに就て言ひ落したことは彼れが作中の社会主義[illegible]言ひかへれば下層（彼は一時代の[illegible]の記者でもあつた）（労働者に同情）

社会に同情して之れを[illegible]博愛精神の下に於ける人道[illegible]の為に付足すといふ位

彼の作は単に[illegible]作品の小説家としては目的が[illegible]の意味である。ゴドウヰン、

ギャスケリーと[illegible]を开いて同じ流れは付けて居るといつてよい、其の理由が一つ又

は作者が自分の好人物を作り出して来て彼れの描く所は自然に下層社会の

善良の方を描き出して来る。醇化せられてゐる。けれども他の作が却て写実

でないとも云へる訳にて、記す事は彼れをもつて理想派の作家といふ人もある

位である。併し当時の人は写実で、其言は皆当代に挙げた、深刻な同感

とか何とかも説明がつかないのであらう。而して斯く云へる深き同感

が未だ非写実と評したものがサッカレーである。

William Makepeace Thackeray (1811–1863) は印度の

Calcutta の生れで幼少にして[illegible]（一時は絵画家になるつもり）[illegible]遠く英国で育てられた。Charterhouse [illegible]

余り[illegible]（[illegible]）第二[illegible]好めるの[illegible]

人生を風刺したる Fraser's Magazine の[illegible]と云ふ[illegible]して[illegible]

(149)

ゆめであるのは1840年のParis Sketch Bookで余ん早く彼の諷刺力、突入力及び情趣の力は見えて居る、（純粋にも文才の）発揮し彼の大作は実は1848年である

流行しVanity Fairと云ふ下の所謂四大作で即ち The History of Pendennis, The History of Henry Esmond, The Newcomesである、其他は何れも雑誌ものであり、彼自ら

講義をして The Humorists of the Eighteenth Century ~~四季 Four Georges~~

一つは 講義をしてアメリカを回って来たのも是れ等の中で有名なものである

である、又 Cornhill Magazine の主筆となって伊太利で死んだ、

Vanity Fair は a Novel without a Hero として見出して、之はエスモンドと並んで最好の傑作と称せられて居る。ディッケンズと直ちに対の行き方は作を異にしたのである。即ち今日はディッケンズの描く如く好性を来つてゐる。それはあまりに多くの己を諷刺冷笑の心でおいて、ディッケンズの表面の世界を見せるものとは異つて居る。人間の醜汚軽笑を写実した、

の行方を行つてゐるを
諸作は、ディッケンズは主人公が度々[illegible]苦労みつ[illegible]
が自伝式の記述であるが（ディッケンズの[illegible]）[illegible]第十八世紀の写実[illegible]
も遺憾なく表露してゐる最大傑作なりといはれる、サッカレーの作品も
は趣味の[illegible]静かに沈んだ形なる、其の趣は作者の気品や Irony
が勝つてゐる。其の戯作はディッケンズに比して一層深く人生の真味に立ち入つてゐると
いはれて居る。又其の描く所は上下二つにわたり特に上層にわたつて、ディッケンズ程の記
に失はれ一層深いでせられてゐる、サッカレーはディッケンズ程の記
写実的[illegible]な[illegible]自明な小説を見せなかつたが風格ある道へ写実を
[illegible]はれてはけの人のみ[illegible]に非ず、ディッケンズも同じくスコット以後の英小説
界に起きた写実の二大流であると思ふ。或はサッカレーはディッケンズの理想
派を排して写実派[illegible]と云ふ批評家もあるが予は大
なる写実の一つの流れであると思ふ、而して此派は大に[illegible]
スコットの作の[illegible]ロマンチシズムを振って[illegible]如[illegible]
にスコットとするも大なる写実の[illegible]出[illegible]して[illegible]ムと[illegible]

存するを妨げざるなり唯サッカレーの作は實際を離れてスコット式のローマンスに
る様しせよの気味あるを其の脈は既に既ましに跳だしてしれあいさるもの
ミミナ向浮なり、ディッケンズ、サッカレー此に至って漸くローマンチシズムから去り
の偏った気味となって浪漫派のあのやうな純十九世紀式の詩人が出て來
ると共に小説壇でも新しい十九世紀式寫實家の丸のを生み出して來た
~~[illegible]~~の現はれて來たと云ふことは明かである。

エリオット前後の小説

以上でデフォー、サカレーからグヰのはいるから次の期に移らう此期は年代から云へば
と千八百五十年前後までをデフォー、サカレー時代とするから其あと二十年許り
即ち凡そ千八百七十年頃迄までを指すので此の期の代表者はエリオット
である、デフォー、サカレーは寫實の流れは技術上の方面で達
人で(利害の二)人の趣味の方は何れであるに於ても小説は時代に向ってでも
る、而して此エリオットを中心として其他の群文星も女流家を

求

をなしたのは忍耐である。其重なるを数へて見た

第一は[illegible]ブロンテ[illegible]姉妹三人[illegible]

Jane Eyre と Emily Brontë の Wuthering Heights と Charlotte Brontë (1816–1855) の[illegible]

是等は18世紀の末で年代からいへば新しいが、デザインは古いが、かたしい時代に属し

[illegible]て居るが其の作品は[illegible]

発動の感情ばかりで性格を中心として[illegible]筆を進めて行くものである

Jane Eyre の如き婦人は例へば女が偏しないで[illegible]

筋とはいへぬ。[illegible]書いたもの[illegible]期

[illegible]只例へば[illegible]妻をする男女は男女[illegible]

とする風であって一般に男と思想の[illegible]婦人との

関係に[illegible]妻は成[illegible]を言いて此が[illegible]前期と云ふ

[illegible]けれども工事は非常に一時興味せられて[illegible]

[illegible]依って[illegible]男女の此作中の主人公をして気

(123)

Trollope

両者の如きものを書くことは得ぬのである。

Charles Kingsley (1819—1875) は英国牧師也。大の Cardinal Newman と宗教上の大論戦をしてゐるの人。小説には "Westward Ho!" がある。エリザベス朝の時代を取りスペインのアルマダを干したる一の武勇伝説的冒険談であるけれども、は婦を愛するなぞと採せしめ其情も出て此作の中に見えることをいはゆる筋の (Henry Kingsley 又小説家として有名)

Anthony Trollope (1815—1882) は多作の人であって凡境を出ない一般一なかつたが "Barchester Towers" "Dr. Thorne" "The Last Chronicle of Barset" に至って名作となった。

Charles Reade (1814—1884) は英の作家として有名であって上にも進み第一と称せられる The Cloister and the Hearth は佳作の一つ和蘭時代の我を描いた好時代小説 "It is never too late to mend" は監獄改良を唱へたもので Purpose Novel である。

William Wilkie Collins (1824–1889) は Sensation Novel 又は Crime の小説ともいふべきものを書かうとした小説である。The Woman in White などは其代表作であらう
Mrs. Gaskell (1810–1865) エリオット、ブロンテなど(並びに)閨秀女作家で "Cranford" 及び "Ruth" は其代表作である。
要するに以上の諸家は皆デカンス、サッカレーに従ひ様々な方面に分れんと途を求めて英国小説壇の趨勢を現はしてゐるのである。或は科学に其の根を付け実たんとし或は罪悪をかいて其傑を付け実たんとし或は歴史のかはりに或は低回的に描かれてゐるのが第一方面即ちデカンス、サッカレー以後の変形たる傾向は種々の形で流れてゐる英の小説壇に存して居る、或者は通俗小説の事業とする者もあれば其の流れ同じとして存して居る。而して其のうち科学的心理的の傾は提示せんとする、ジョージ・エリオットによって高められ、而して後現時迄の小説の最も高きを占領して[illegible]

(125)

写実派のものは其の足跡の一部分として示そうとしてよく行はされて其の
他の冒険小説の趣味は様式等の何れかに属した脈の伝承のみがある中に
ひとりキプリングは詩に於けると同じく究むる所も一種風韻あるものを示して
ので其を有する文学的地位の重いのは此の点にあるのであるが此れは後の
ことしてエリオットに入ろう。

エリオット。

George Eliot (1819-1880) 本名は Mary Ann Evans で三十四歳
の婦人である。年 Westminster Review の記者をして George Lewes
Lewes と相知り結婚はせぬが妻であった。かくて此女は生涯を仕かけた
~~エリオットは遂に之に随せられて之を小説に[illegible]~~
~~エリオットは其に[illegible]~~
此人の死ぬるまでは結婚はさせなかった。文作上にも同じく
此男の生前の別れが与へて力があってとするのである。彼の死

Mary Ann Cross née Evans

(126)

めてあるが即ち1859年のAdam Bedeで之は水車業の婦
で俗名して生活をして居るのりあるものまで至りて、The Mill on the
Floss (1860) Silas Marner (1861) を彼女の初期即ち未
だ揺籃期と見てちかなかつて素直の時代の作として即ち後期と云
ふことと見るのが妥当の説であらう。又(1863)年
のRomolaは伊太利を選んで紀元と為して已に重くるしく成りかけ
てみる。其が中々るの第二期を示す作はFelix Holt (1866) Middlemarch
(1872) Daniel Deronda (1876) 等で此の第三期で其の
作は全て余りに重くるしく退屈で Middlemarchの如きとて評を免れぬ
要するにエリオットの作は知識的発展の過程を示しつつある且同時に
文藝としての価値が逆比例に減じて行って気味がある。一斯

(129)

やらん哲理的合理的なことを考へたのpose もう一歩進んで来て社会的意識 衝動
及び事を起すこと強くわかる意味をも言へるといって来て要するにエゴイ
ツトの位の強さは十九世紀文藝の過程の指導であった。

現代小説の論

此に現代と云ふは十九世紀の末二三十年(から今日迄)の事にて丁ち千八百四五十年以後も去り今の時代である。唯其中(年代の上から云へば)二人の元老とも云ふ前代に属する人はメレヂスである。彼は殆どエリオットと同時代の人である、併し既に活きて居る時から現代の部に属せしめて居る文作風から云ふも、メレヂスと他のゼー父やハーディー等と用じて此があつて此全特の作風がむしろ前代的である。守先づ其の二群の作品から別って見よ

George Meredith (1828―) は法律を飛びて文学へ志が移って全く二十三年始めて詩作の作を雑誌に掲げ1851年にPoems を出したが却々好きである。併し彼の出世作は小説として世に認められた此の作は The Ordeal of Richard Feverel (1859) で云はば

エリオットの Adam Bede と其の同年である。之より後の作では
1879年の The Egoist, a Comedy in Narrative が最も名高く
又長く代を同じうする傑作であらう。其外にも作は多い。Diana of the
Crossways (1885) The Amazing Marriage (1895) 等が其の
最なるものである。彼の作は其の心理分析なる点に於て又其の性格描写の
[illegible]に於いてエリオットと酷似せしもので作風の心理分析、描写的科学
的なる点に於て先づ同じである。たゞ之に於ては一味のユーモアを加へ
一味の[illegible]を力を加へ之等味がある。[illegible]紙中其女主人公の性格に於いて
[illegible]力の背景を描いて居る意味がある。而して其の文辞は簡潔
にして整合み[illegible]ど、動もすれば晦渋の嫌あるを免れず、殊に
外国人などには読み難き文の一なり。除けばエリオットの描写は[illegible]
の名み[illegible]十分に其名を博す殊にかし 観あれど其の機軸は
用ゆる点は英の文壇に於いて少なきを示すであらう。[illegible]
第一の元[illegible]山民派である。

(132)

Thomas Hardy (1840—) は建築家より[illegible]年に初めて[illegible]
で Desperate Remedies を出したが初めて最も傑作[illegible]
して代表作と[illegible]に[illegible]のは Tess を[illegible]である。
一[illegible]道路の女が[illegible]に[illegible]陥る
[illegible]の[illegible]遂げるの[illegible]其の運命の[illegible]
人世を[illegible]して[illegible]を[illegible]にしたものである。又作者[illegible] Local
[illegible]のものであるが此の人の[illegible]の作が[illegible]て[illegible]
[illegible] Scene の[illegible]く、此の人の作風は[illegible]心理
[illegible]的で[illegible]である。[illegible]
作風である。
Henry James (1843—) はアメリカに生まれて英国に来た人
で其作風は[illegible]心理的の[illegible]であるが或は

(?)

之を評して〔ツルゲネーフ、ドーデー等の影響を受けて〕インプレツシヨニストとするものもある。而して印象派と普通の写実派
写実派とは一は外部から内面を写し他は内から外を写す
点で相違する。此の人はハーディーの十数年来さーせる作のならぬは
而して当時は益々に佳作を出す。又此の人のは短篇に面白いのがある。
最佳作とせられてゐるのは（1890年）の The Tragic Muse など
である、又最近作では The Wings of the Dove (1902) が好評である。
要するに目下に元気を失はないで而して元気の旺盛なる個人を
保ちえてあるものは此の人である。彼は夫の心理を写出した人
の一人である
Mrs. Humphry Ward (1851–) は Arnold 家の女で
して夫のマシユー アーノルドの親戚である。英国女小説家の元老
と称せられ小説壇の大家の一人である。作は先づエリオット等の

(134)

筆を引いて居るが、内容の上に於て既に戦争宗教小説の（宗教思想を…）

問題を含んで居る。代表作は Robert Elsmere (1888) である。

当時のオックスフォードのグリーン時代の倫理宗教の革命思想が

現はれて居る。足れなきは単に［illegible］な所がある。Mrs.

著名現代の生きて居る人の一人で最近作には Lady Rose's Daughter (1903)

が評判の作である。其他1894年の有名な［illegible］は即ち社会主義

の運動に触れたものである。

Robert Louis Stevenson (1850-1894) 本は上の写実派理想

派の上に更にローマンチックの旗を揚げんとしたもので、文章の簡潔にして

力あるは且つ叙する所の力ある深くて趣ある特色の外、内容は評判アドベンチ

チュアを中心として現実の社会を離れて空想の天地は広大し

［illegible］奇しく極まりなきもの 英國といふ所に［illegible］事件

騒［illegible］

(135)

よく之を解放し元氣な彼の非常な勢力を得しと見てある。彼は其（スティーヴンソンの文也）
紀律を修めしか[illegible]作品を[illegible]あれんめ
苦痛を与た、[illegible] 1886年に The Strange Case of
Dr. Jekyll and Mr. Hyde を作つたのは此作の已に得つてあつてゐるを表はし
てゐるので[illegible]（心理學を應用[illegible]）[illegible]前作の Treasure Island の作で
ある此等の作の外を出でに其名のも[illegible]せられるやうになつたものである。
又此年の Prince Otto と云ふ一種架空の時代物である。尤も此は三作程せ
の Kidnapped (1886) & David Balfour (1893) 及び大学時代
新しく読んでよい（The Master of Ballantrae (1889)）と云ふ事も
それからスチーヴンソンの作は女や恋は少なく[illegible]で男性的の風味が
勝つて居る事が何しろ[illegible]意味でスコット以来のロマンチックの作家として
見てあるであらう。
上に云ふ論旨[illegible]の外ちょつと此

宗教的なものに一味のローマンチックな所をも加味して一層多くPopularの方面に
歓迎を有しつつあるのがHenry Hall Caine (1853) で彼はハーディのWessexと同
じく其の住んで居るIsle of Manを舞台としてその島を世に紹介した人である
1887年のThe Deemster 1894年のThe Manxman
1897のThe Christian, 1901のThe Eternal
City 等が其の傑作で最近は1904年のThe Prodigal Son
がある

~~何れも大抵英国の中流社会の家庭を描いたもの(田園詩的なもの)好の~~

~~此の他女作家Marie Corelli (185~~

(137)

此十四五年乃至二十年来の文壇に現はれて来た人で言はば真の現在を支配しつゝある人では前に言つてむしろスティーヴンソン等よりもしくは之に近くして而も内容の通俗趣味に勝つて文壇的価値に乏しいけれど冒険談と呼ばれる範囲に属するのには Henry Rider Haggard (1856–) は専ら Adventures の意味を中心にしたもので加ふるに其の通俗した亜弗利加に材を多く取つて居一種の人気を博した先づは方面の大家であり (1885 年) に作あつたが 1885 年に出した King Solomon's Mines に至つて非常の人気を博し即ち通俗小説家の地歩を固めてしまつた。此作亦亜弗利加冒険談の小説である。次には Arthur Conan Doyle (1859–) 先づ第一に推す Detective Novels 即ち探偵小説の宗では通の大家である又如何通俗人気のある作者である 其

代表作は千八百九十年の Adventures of Sherlock Holmes で短い純粋な探偵小説を集めたもので之亦直ちに Adventures と云ふ名を附して居るでも探偵と関係ある事は是でもある。殊に此書の主人公冒険談 Holmes と云ふ探偵は奇なる性格として人によく知られて居る其後にも此作を続けて居る。次は Anthony Hope（千八百六十三年生れ）は千八百九十三年から Dolly Dialogues と云ふ此人までの通信小説の形を取った「[illegible]」から離れたる人である。代表作は千八百九十四年の The Prisoner of Zenda で千八百九十八年の Rupert of Hentzau は其続きともみなすべき作である。此作は Adventures を中心として作ったもので前者の作者と材は違っても趣は同じものである。之れと同じく冒険作者の大家、右のプリゾナー・オブ・ゼンダは一種の歴史小説の性質を帯びたとまでいはれる小説である。次にアンソニー・ホープ

とも評けんぶつは ~~Francis Marion Crawford (1854–~~
~~Henry Seton Merriman (~~) 本名は Hugh
Stowell Scott で 1890 In Kedar Tents などが代表作である
之は Spain での Adventures を中心にしたものである。又 Francis Marion
Crawford (1854–) も同じ行き方であるが、すぐ〔れ〕たのは 1890 年頃からで
と ~~[illegible]~~ の A Cigarette-Maker's Romance
が一層多く文壇的価値の批評を得て居るのは同じ方面である
る。尚十九世紀の作者の中に加ふべきは女作家(奥様)及び Marie
Corelli (1864–) である。彼女の行方は奇めかしい背
った方面でアムビシアスな作をやってのけ、即ち宗教上の問題を多く
取って之れを取扱ったもので仰山に高い調子で書いて人気
を博した。然し結局は文学上の見識の乏しいのが遺って居ません

ホール、ケーンの社会主義と好一対と言はれる程作風も何処か似て居て競争の気味さへ帯びて言はれるのもある。仲々悪い。其の代表作は1896のMighty Atom及び1900のThe Master Christianで有る方として一種の自然宗教で学の牧師の方法を批難してゐるのである。元気な女小説家である。とは言ひながら定評もさしてこれ上は(ことに現時のPopular Novelist)文壇的にも地位を認められて居る女流であるが他に更に一層通俗なる作者は数ふるに一切の程度言ふに足らない

女小説家の作者で人を牽けば一時の一群は生まれた文壇的では性格は作風がむしろローマンチックでなく方の上品さを認めて出来ない通俗のとすればRosa などと文壇的にはローマンチックの方は

の方はこなして不出来ながら通俗卿になる上出来は当つかない
となつてあると思はれる。先づ Mrs. Clifford (　　) 女史
の Aunt Anne で名を得し Miss Cholmondeley (　　)
はなる身の Diana Tempest など代表作 ~~[illegible]~~
~~[illegible]~~筆でせる凡てむしろ写実方面にかけて居る人。通俗小
説から遠ざかつて居る人々である。
~~[illegible]~~だつと浅薄的地位を紹介して居る人では先づ同年代
の上から言つて George Gissing (1857—) は社会主義的傾
向をもつて来た方が性格研究的にかけて居る。写実の点
あるが深さを[illegible]して居る作者である。代表作 Demos
A Story of English Socialism などがあるが、此上は

(148)

James Matthew Barrie (1860—) は~~[illegible]~~ユーモアとペーソスを加へて一種の調子を持って居るスコットランドの小説家で然も最近四五年で大名を博した人である キップリングと並存してもっとも望な作家の一人に算せらるる人である 小説の方での代表作は A Window in Thrums (1889) で是と同じく佳作と称せらるるは [illegible]年の "Auld Licht Idylls" の続ともなるべく（冊中の出来るもの）読んでは居ても一のスケッチと見られ得る滋味ある作である。Jerome Klapka Jerome (1859—) はむしろアメリカ式の滑稽作者である 其代表作は1889年の Three Men on the Bummel などでも欧大陸旅行に託して其国俗殊に独乙の風俗を批判したものである。Israel Zangwill (1864—) は猶太人で猶太人の気を吐いて居る作家である

(143)

が新進としては大いに望まれてゐる人の一人である代表作としては
1892の"Children of the Ghetto"に於て猶太人を描いたもの
又1895年の"The Master"は藝術家を主として書いたものである。
短篇集は近くは1903年の"The Grey Wig"などがある、作
風は矢張りローマンチックではなく方に属する、一味のペーソスを
も極滑稽なユーモアをも持つてゐる。Joseph Conrad (　　)
は作の出た年代から言つて見ても新進であるとはよく[illegible]く其作
は材は好んで東洋を取り又作中には
女性で恋愛を余り多く出さぬでも矢張り心理的写実的
とするで其作では1897年の"Nigger of the Narcissus"などが主なるものである
又1898年の"Tales of Unrest"も戯曲の形をした二篇

(144)

を集めて批評家から評判であつて又1902年の[illegible]にて出した
[illegible]の短篇集も見るであるさて以上を総べて偏し高
実振自然振の脈を承けて而して之に対して特殊の地位を占めて居る
のが小説家としての Rudyard Kipling であらう。

(145)

Rudyard Kipling の作は詩でも小説でも面白くて好きである。尤も彼の小説も其の他の作家と同じく特異であり、而も詩は写実で或人は之をサーチライト式の写実と書いてゐる。異常な経験を持って行く彼岸に鋭い写実で新鮮された味に出すと云ふ意味である。併し同時に彼の無味の風物はロマンチックである。並無関係なものの即ち特殊の場所を選んで写し出す。加へるに其の手柄ある人は社会の未人乃至印度人の冒険の性を帯びて来る迷信の色を帯びてゐるものばかりである。又或ものはジャングル・ブックがそうである。又如ライダー・ハガードの作品と見られたとしてもそれでも其の風物は鮮やかなる作はガードするかなく空な冒険作ではなかったがそれを得て更に読めばよいのである。又或は彼をアラン・ポーの作と比すればよいのかも知れぬ。其の作中に印度の経験を利用せずには居られないのである。又或は

(146)

彼等の作中には女が少なく我等[illegible]女が少なく婦人の[illegible]
少なく[illegible]二三あるにはあるが其の中でも大て女性の筆は
危いが余りに官能的なことを好み乍ら所謂 bold line で
描くことを得意としてゐるかもしれぬらう、又彼は[illegible]
dead stillness で [illegible] を強要するのみならず過ぎることをも知るから[illegible]
ダ併又彼の様に色を付けてゐるのである。又彼は[illegible]
[illegible] を唱へて東西と延いては他の連携を忌むと言ふ人種
である。男[illegible]剥除かりよりも戦争は[illegible]
なりとする様なので彼は戦を論って東西の陸海軍を
強めることを力めてゐると称せらる。但し之はオブリガシオンであるのは
勿論ない、政見部面の人は軽く見ても二十六[illegible]
に因り作用を持ってゐる。只オブリガシオンを一層強めることを[illegible]
るのであると言はれてゐる。又或は彼の作は替へれば [illegible] を

は非常に強い刺戟それとも scenery を[illegible]長く描き出して来ぬ
性格などといふ空想的用具のあるものに従事した所を描くにもじっと人
であるよは所であつて 性の対としては 命 dramatic といふ批評が起るので
ある 彼は full of life and action である、其の他彼の一毛註すれば一味生
~~[illegible]~~ Bret Harte に近い所がある（其スヂキリとしたまこと）（山鬼猫に於ても）又
Golden Gate の Seekers など では Kanaka に近い所もあるとしらぬのがあるところ又
彼の地域的である所は特に注目を要する点の一大で[illegible]の original とよ
ことが彼の興味の主要部である。彼はよく男らしい方が[illegible]前
言ひ女は寧ろ男らしい所を偏し男を写して女を影に出して話
かすといふ所はトマス、ハーディーと対せしめ[illegible]と評されるべき。又彼
は物を写すにもしても[illegible]そのコンラードなどと比せらるる
彼の労作の生なものは、ななつ年の Claim の Tale from the Hills

短篇集で、印度のSimla を中心として描いたもの、1888年の "Soldiers Three" は印度に居る三人の流浪者の冒険記を中心としたもの 1888年の "The Story of the Gadsbys" "In Black and White" で [illegible]人の話に寄せて其の信を描いたもの 引きつづいて四年を出て Wee Willie Winkie; Under the Deodars; The Phantom Rickshaw 其他を列ね云ってポー式の[illegible]の作でもある
1891年の "Light that Failed" は アムビシアスな作と称せられる 同年の "Life's Handicap" も太く暗い沈痛な話の多くを集めてものである。1894年と翌年二冊 "The Jungle Book" を出して印度の動物などを材として お伽話を作ってもので

(149)

最も評判の作である。近くは1901年の作品では
女の女たり小説の例である。作品とする英人の子の職工娘達をよせて即ち
のライフを描いてゐるものであるが、却つてもつとも乾燥無味
で退屈、且筋が中心の情味がなくて却つて面白い所のあるの
みとの批難をうける、且後にこい作の一つである。

十九世紀の英批評界の雑誌

雑誌のこと

批評のといつても昔ではまう天才批評をしない、そうして云ふ者は如何
なる雑誌である気味であつてかけよそを見て概評してまく
と十九世紀のはじめから十七世紀の雑誌の批評家といつてもよい、
そうして其の時代の雑誌は [illegible] Reviews であるその如し

(150)

あるのが僅々三年で当時エマヒベうは其色の二千円地であつて
アーて発起人は……と云三
人の若い法律家、閨秀や技師等が寄つて九編つて出したので
ある。御文藝のみとは限らず 但し主脳はせつしーであつて 諸方の法則が如何にもあるさを
批評する 年四回で第七号は凡て……でやうと組織であつて
此雑誌を為せす……やうとするまま同人の雑誌は持続して
ゐて、此の文士を非とするものもおのづから……を別いてゐる。さうして
雑誌は非常の成功であつて……誌らしかつたからである。当時批
評一切のすべてはまで彼の……と……の筆はついて廻つてゐ
つを此雑誌は死めこから北上して……関係とする標榜
であつて併し誌らはこは……の市にあつて時に……

(151)

其五討のToryの機関が起りて起ってThe Quarterly Reviewが之である。1809の年に創刊されて之が主宰者はWilliam Gifford一John Lockhart等である。而して大二等の両雑誌とも本来の執筆者は大学者で何れ一日本で批評とするも基礎が未だ概念する出来てなかつたため多くは無かつた自動的な初めて稍ローマチックの新派を打撃して同感のない陰らな批評界の批評せやつて併し一方では大学の雑誌で地歩を見出さないで文壇にも多少はある。次いで出て来るのがBlackwood's Magazineで之亦非常な批判を加へて居りブラックウッドとか紅はバラの出版者が発化しているので之をMagaと呼んで一方では残しているのである。之は雑誌のの

(152)

古義せし如くかしも評論のみを限らず雑誌の雑誌たる所以を発（まづ毎月一回発刊し）

揮したもので其の会を却て週刊のものの如きならしむ[illegible]

読まれる。是れは其の如きはブラックウッドである。[illegible]此年の三誌出版（其都度批評をなす）

ところは[illegible]悪罵を以て売り出したから

[illegible]世に存続して居る。之で英国の雑誌の元祖は此

まで続いては、つづいて出て中絶したLondon Magazine、また後

年出たLongman's Magazineと並存して存続して居るFraser's Magazine、

之は1830年の出で之等は凡てブラックウッドの論を模したもの

であるが此のフレザースの方は当時の大文星を寄書家に網羅

しまとめ真にえらい雑誌である

(153)

評論としてチーたものでは大の知る Speaker 劇判とものでは1887年のの Era

此四ヶ英国雑誌の事を一言した エヂンバラ、クオタリー、ブラックウード、
フレーザー等の勢力を説くから次は1860年の Cornhill Magazine 等
を経て現在に及んだ事を（1859年の Macmillan's Magazine）
一言すれば足る。フレーザー
ロンドン始めて出た価月刊の風潮行けれテーニル、マクミランになって盛さ
うなると共に署名式をも盛に採用する事になって、名で読む便で
匿名といふ風が漸く盛になって或る味でいふと雑誌の力を発せ
られた勢力が衰へかゝって来て仏向を示す様である。1865年
には Fortnightly Review まで出て 1877年には Nineteenth Century 又
Westminster の如き純文学雑誌
科学に関したものでは1828年の Athenaeum 又遅れて出てで
の週刊は1855年の Saturday Review

(154)

~~専門的のものでは~~、アセニアムと似た方向のもので1869年の Academy
などは最も早く且つ名のあるものです。専門の美術雑誌では1844年の
（尚十二号の劇を掲げてゐる）
（当年に於ける ee 挿図）
月刊 Musical Times、
（1841年の Punch の諷刺戯画に於けると同じく戯しいもので
は特に記せば Musical 美術に於ては Studio 其の他特に科学
に関するものは多くある。文芸に干するものでは劇の Playgoer（絵入？）
Stage などや美術の Magazine of Art（絵入此年？）之等では
Author など又政治経済を主にしたものは Pall Mall Gazette、
Westminster Gazette（夕刊新聞）を同じく発刊する
雑誌的なもの）など ~~[illegible]~~ があります、諸の雑誌一覧として
風の噂でしる

1857年のStandardは保守的な新聞として主なものである

なかでまたは例のReview of Reviewsがある。

新聞では~~[illegible]~~例のTimesの創刊が1788年で週刊

の文字附録をも添へる。之が後に一の週刊文学雑誌程の勢力を

占して居る。（但最古のは）Pall [illegible] 1865年の創刊で[illegible]、格は（今は）タイムスと

の三斤新聞なるに対して一片新聞の列である。（政見は別として）貴族向と呼ばれてゐる。

然し文藝の趣味もある（佳きもの）余裕のある新聞である。Daily Newsは1846年

の発刊でヂッケンスなどの干係した新聞であった。[illegible]保守党の日刊新聞中

最も相対方面に多く読まれて居るのである。（自由主義である）近時[illegible]林陰の之を Daily Chronicle

社会の各方面に之を称せしめて居る。

は1855年で各方面に多くの利用を新聞と称せられてゐる Daily Telegraph

は猶太人の経営[illegible]（1855年の創刊で）実業新聞と称せられて居る之には

サー・エドウヰン・アーノルドが干係して居る。是等四紙は[illegible]新聞

(156)

謂一片新聞での主なるものである。半片新聞即ち小新聞としては
（彼ニューヨークの二流新聞は近代半片なって）
するが其の特色がきわ売ることを目的とし所謂三面種のセンセーショナル
なるを得意とする。凡て調子が軽く誇張的であるとか言で我邦にも
あって正則と似ても似つかぬ。併し此の半片新聞式の傾向は一方ならず
新聞社界の近世の傾向で（世界的）此の通俗的な勢力には何れの新聞も押
し倒されて形跡がある。新聞界も又其内には一の革命と称す
るかも知れぬ。我邦として同じ形勢は免れぬ。さて此半片より中
ではデイリーメイルの1896年に出て一世を風靡するや新聞製造術
にも亦一の革命を起したといってもよい。之れ計りでなくデイリー
エキスプレス（1899）等である。前者に出はキャップリングケー千係して
其他は新聞ないといふのがあって国民朝刊の新聞が出て其後は
朝から引つけて数化発行する。大抵半片である。そして此

(157)

文藝復興の日が明に出る興味は未だし其中の日々の種々の大ゲームの勝負へ
P18 つまりとつて行つて終末の気風の一部も垂せられる。

十九世紀の英批評

十九世紀の英批評界も創作の方面に於けると同じく十八世紀の概括的なりしクラシシズムの反動に其の端緒を開くと言つてよからう。セーンツベリーもいつてゐる如く上中世は一二の例外の外作者が筆を執つて散文で批評の方面に対する批評の総数をやつてゐたのは少い中々多くも。近世の特色は其の三ケ書…であつて十九世紀の批評は此の形勢で幕を開けたと見てよい。而して此の幕を開けた人は保堅にも創作の方面で浪漫運動の幕開をした其の同じ人々であつて其小なワーヅワースとコールリッヂとを指すのである。十九世紀の

(158)

英批評は此二人で新しくされたと言ってよい。されば其の傾向は初めの

ブレークの創作に於けると同じくローマンチックと名づけ得るものであって

即ち十七世紀を代表する佛のボアロー等のクラシカルの文藝批評の

法規に反抗せしめたるもので反対して其の極端に於ては一切

の形式を文藝批評中より取り上げ殆ど排斥せんとするだけの勢を

示したのが此の十九世紀初めのワーヅワース一派の思想であって、

ロマンチックではありしが、それがコールリッヂを経、[illegible]

[illegible]を経、[illegible]を経て一長一短の[illegible]に至って

評價[illegible]を形づくり而して更に[illegible]

[illegible]等のナチュラリズムを生じ[illegible]に至っては歴史

主義、快楽主義、個人主義等の論[illegible]他傾向の新[illegible]として

審美主義

相交はり新批評家理とならぬ基礎の却掠する形勢となつた。

批評家としての資格を比べれはワーヅワースよりもコールリッヂの方が上であるとは無論に確認するまで実際十九世紀英批評の祖を求めればコールリッヂを其れとすべきであらう ワーヅワースはむしろ詩人であつて批評家ではない 唯其の~~[illegible]~~大の詩に於て新派の旗幟であつて其の同じ~~[illegible]~~[illegible]の第二版序を附して世評に備ふる所を述べたのが旧来の詩の千古の主義即ち（クラシシズム）打撃を与へたのであるこめに批評の端緒がつけられ此人を率ゐるを得るのである

ワーヅワースが Lyrical Ballads の第二版に序を附してあるのは

(160)

係ってであって、其の大意は詩は材料に於いて common ... であるが
文章を表現するに常人の日用なる語を用ゐ、さらば
詩は spontaneous overflow of powerful feelings
であって、poetry and prose の間には language の上に何の差別もな
いはず。詩語在来の poetic diction 詩句格則のねきは無用のものであ
る。とすれば詩の韻律のぬきは自然不用のものとなる。是れは文章
旧来のクラシシズムを代表する詩形を極端に一切破却せよとする思
想からきたのである
二を代表者としてコールリッヂは出て来た。コールリッヂには批評家と
して二重なる見があった。其の一は Biographia Literaria 中に
右のワーヅワースの意見を詳しく批評して他の一は Lectures の中
Shakespeare である。前者に於いては彼は其の創作に於てワーヅワースと
同じくロマンチストで、十八世紀派の反抗者の一人である事に揚げ

(161)

ず思想の上ではワーヅワース程極端に~~[illegible]~~はしれかずして
極低の説をたてた。是は盖し其評論の評論家として立つて彼れの
（一層）自然の立場からまうすであらう。ワーヅワースの考へは
詩の形式韻律は全く無用であるとして其の羈絆から脱出せんと
した。而し之は~~[illegible]~~しか少なくとも当時では不可能
と見えたし又何うでも高大なる組問であらうし決して斯く言はず
ワーヅワース其の詩からして決して韻律それのを一切脱出し
て詩を成して居るとは見えぬ。それでコールリッヂは詩と韻律
の分かち得る性質を是認せざるを得なかつて Coleridge 氏
の素ものが詩たる事を承認した。而して詩は真理たる性
質を主張とするとみなすを承認した。（之はワーヅワースも指摘
を主張しながら詩は性質説に入つてヒセーンスベリー氏が言つて居
る）併しコールリッヂの立場は既に自ら撞着の所があつて

(162)

ワーヅワースに気兼して　故によつては語彙のみが詩ではないとまで言つて居る。之れは此等の論を排斥すれば語彙の真面目を忘るゝと同時に甚だしき外に詩の要素はある。両方兼具せねば詩ではないと云ふ極めて折衷説になる。而して其の何れも欠くべからざるも common life 詩であるとは言へぬ。~~神通~~て詩人に適して詩に適せぬものもあると言つて居る。極端なリアリズムでもなく極端なローマンチシズムでもない故方に是認すべき点を認めた説になる。

(163)

Coleridge が批評家としての立場は最も多く バイオグラフィア・リテラリア
に見えて居るが其の他の批評的作物では Lectures and Notes on
Shakespeare が最も纏まるもので其の特例の欠点を見ぬ前に見つ
[illegible]さえ出でんとする力めよさ批評家の[illegible]を実現れた[illegible]
もとも於いて物事の新しさを提唱すれば何よりも有力なる
古来の批評家の一人としては人の知る通りである。
コールリッヂと同年代と見なされる同時の批評家では Lamb, Hazlitt,
Jeffrey の四人を数へることが出来よう。Charles Lamb (1775-1834)
其の中で批評家としての最高位はハズリットに占められる。彼れと
アールリッヂとを人によっては英国最上批評家とも見るが
併しアールリッヂはむしろ詩人としての地位其の方を奪われて純
批評家としての少なくとも十九世紀前半の最高位はハズリットに帰して居る
気味である William Hazlitt (1778-1830) は其の批評的観
於いてアールリッヂと同じく 哲理を[illegible]

(164)

(書こむ)

はやる式のうちこれの批評を与へ作や作者の中から其の特色のこと掴
みだすといふ方式を取つてゐる人で、
六号も見事で其の評論は
面白く読まれる。併し此人は文学を実際に味つてゐる範囲が甚
狭く且つ其為めに（セーンツベリーによると）往々間違つてゐることを言
つてゐる。併し余は　吾人一向気にかけなかつた
らしい故に彼れの批評は彼れの個人にて其範囲だけでの批
評であるともいへ、要するに政治式を中心とする国の
批評の結果である。又彼れには或程度までの不性な批
評が累するといふ人もある。若し其の詩歌に対する才能ある地ほコール
リッヂと同じく（コールリッヂの想像は紋章を超越するといつてゐる）
評はなきとの見地から彼の重なる批評
的作物は Lectures on the English Poets (1818) Lectures

ハズリットは其の temperament の temper から批評であるから同代の人に受けなかった
死後も永く遠くなってやっと其真価を認められ殊に最近に漸次これ
は加って行く事になって来た。

(165)

On the English Comic Writers (1819) Lecture
On the Elizabethan Literature (1820) 等
Characters of Shakespeare (1817) 等々
Charles Lamb (1775–1834) の性格は Gentle Lamb と云
はれる程で最もよく見はれる程彼れの文は詩としての地位は我々の上では其の
ある Tales founded on the Plays of Shakespeare
(1807) で最もよく知られて居るが彼れの批評文もまた其の文学の
偏な軽い醇味のある文章直な文章で出来て居るのである。(1823) Essays of Elia
(同情の事) ⊗ 文集 Essays は全く彼れの批評家の方面を代表して
ると称せられる。十六七世紀の英文学史は其の最も適當
しこうして之を信じられて居る。併し批評家として我から言へば其
ご大なるものではなかった。唯全般の彼の作はおのづとコールリッヂ、ハズリットに
劣と同じくローマンチックの方にあって、凡ての作に同感して之れ
を表白するとなす式であった。
Thomas De Quincey (1785–1859) はラムと同じく其の文が批評で最も

(166)

私である。批評家としては一方形式上思想の[illegible]要を唱へ[illegible]個性的特色を認める他面を持つてローマンチックの人であるが他方では修辞[illegible]を説いて或点を甚しく措捏すると共に[illegible]己が規則に合せざるものを認識せざるクラシカルの精神を持して居る。[illegible]例へば Pure Poetry を斥ぶ張りも Poetry は概して重きを置いて居たが散文に対しては率直な或ものゝいゝ所を認めなかつたりした位である。其の一代の代表作は Confessions of an English Opium Eater (1820) で甚他の雑誌に寄稿した論文で名である。結果は年代からいふとハズリットラムよりはむしろ遅い許である。

「Francis Jeffrey (1773–1850) [illegible] 次の二人で此時の雑誌評論家の巨頭を挙げると其二人が即ちゼフレーで彼は前にも言つて如く先の Edinburgh Review の主宰者とし批評の筆を揮つて彼は元来法律家であつて、1803年即ち三十歳の頃の此刊である。是れがワーヅワースやスコットや其の他の未来の文人を片端

かく開いて併し後にはカーライルを見出しマコーレーを見出したかある
當時は殆んど英國第一の批評家と思はれたが、併し其の時は〔売〕はせん
で今では全く文學史から割り出さうとする人もあるがそれでは
それは云はば新派の論旨で舊派の批評が然したかどうか問
或程度までは狭い標準で他を評するのであるが、併し其の狭
い標準としてそれのかまはずもイラしさなうて定着しないのではなく目に
はば其時々の不定な狭い空想の断案を認められるのらしい。従つて其
批評はあらうが目に見て當然とせられるのと眞なるものを求めて
スコットを罵りワーズワースを罵つてゐるなど即ち其例で、今評の
詩人としてもつまらないでもつかれぬ點も有るがせてしまつて罵つてる
は今日では却つて其の美點とせられるのである。（スコットの點の新古代
を取り入れた事、彼の描寫されたる景であるとセーンツベリー氏の如き
結果は其時々の意見からも来ると云はれるのである。要するに
批評としての標準の批評の根本の缺點であつて、斯かる難
記としての批評家の方面はもつと〔…〕したので済んだ筆に了る

John Gibson Lockhart (1794–1854) の如きも又其一人で、才気ありて能く批評家を代表せしめた。彼れは夫の1802年より起つたエヂンバラの反対雑誌 Blackwood's Magazine 及 Quarterly Review の評論家で後には主筆になつて、彼れの批評の調子は一方には其 Scott 論 Burns論 などは頗る善いものも言はれるが一方に於てはセフレー氏と同じく酷評で至極なものが多い。同感の無い評である。代りに智識は十分にあつたらしいが、其の気を帯びた。好んで人をいぢめ（此等で採択はまず）評をなされて、其の Review の批評は Tennyson の初期の作を評論し、それに又の批評は甘く（であつて）さきは追かつたである。又 Blackwood's で夫の至極な人身攻撃の批評も続けてやつてのけた男である（小論に司は無名であるのごが）其の外は純粋な評論家で William Gifford (1756–1826)

John Wilson (1785-1854) などがある。
William Maginn (1793-1842)
さてこの期に入ると Thackeray、Macaulay、Carlyle
等の時代になる。而して M Arnold、Ruskin 等の時代を移ってさて現代
に及ぶのである。[illegible]のを境に十九世紀の始め三十年代以来までと
其の後の二三十年が右の期で次が十九世紀終末凡そ十年乃至二十年代から
二三十年の事である。而して現在に至るのである。
而してその第二期即ち十九世紀の中葉を擁する時代の特色は[illegible]
一方にはロマンチックの傾向が一方には純粋なクラシカルな規定の標準
で作品を批評するの基礎を破ると同時に他方には記述[illegible]や
根底的ならず主観批評は形式の主観的
な、即自己の好悪の判断に入るかならずんば去って全く外
から標準を持って来る例へば道徳の標準とか社会の標準とか、

なるものを持つて来るの外無くなる、即ち一方批評が非常に個人的な
好悪喚罵のそれとなるの外なく〔なる〕と共に他方にはあるものは
文藝と社会交通とを混じて此れが傍に入つてくるといふ形跡を
示す。中葉の批評界即ち是れであつて、不十分ながらブラウード
其の他の批評評論にはテニスン其他の青年作家に対する罵評
が盛なると共に一方にはサッカレー、マコーレー、カーライルなどの評が文藝の
批評以外に出でんとするの傾即ち之れである。而して此形勢の反
動が遂に近期の有機的標準期即ちアーノルド等のオクスフォード
期となつたのである。

(171)

十九世紀中頃の批評壇にはサッカレーの（前に述べて置いた）Lectures On the English Humorists of 18th Century の外 Thomas Babington Macaulay (1800–1859) と Thomas Carlyle (1795–1881) の二星あり、サッカレーの批評は主として文学以外の動機から来て好悪が強く主観評のではなけれども
隣り少い好子で詳んで（熱い所がある）いけれども、又マコーレーは Essays に於て論議の評論文ありて文学批評的評論が重要の部を占めてるけれど、
注ずるに其の興味の中心は政治社会の実際方面にあつて、
漸次之れに傾き去つて
気味である、カーライル亦同じく傾向を示し
倫理道徳形而上の方面に重きを置いての批評家と説いて
歴史家として著しいは此方面に傾かんと共に文藝

(72)

をば抑へて[illegible]る力を示した。此れ文学史[illegible]などんな文学

評論家であると共に Sainte Beuve、仏蘭西革命史、英

雄崇拝論等又文明批評家の手色を発揮した偉人[illegible]

ては文芸 Pamphlet などんなんで進んで文藝を解し現実を

重しとする偉大なるものである。[illegible] マコーレー、カーライル二氏の如き

をいふ。前者は明快で後者は玄晦、前者は浅近で後者は詳密、

前者は常識で、後者は哲学である。[illegible]

[illegible]

次にマシュー・アーノルドに至ると茲に体の[illegible]

初期の 近世文壇の大批評家と称せられる人である

する。彼れのは種々の評論もあるが最も代表的なのは Essays in Criticism 文藝家[illegible]

中の論文である。此の立場は一面には

古来のローマンチックの主義と同じく作は作として[illegible]と見

るを要の批評とするもので[illegible]倍し直の Sainte Beuve

(173)

Propagate する best that is known and thought in the world
世を批評の精神とする所已に既る知識的である事を示して居る。感ずる
よりも知るといふ方面に傾いた批評の根本はあるとも見られる。
また一方に於て規則を仰げる自由の精神を持ちながら同時には grand style
を詩の要素とするなどいふ[illegible]を生ずる事には simplicity を要求
serenity Sereneness を要するなどいふ事に至っては已に大に Classicism に近づいて居る
かゝる意味でセーンツベリーは彼を old neo-classicism と Romanticism と
の移居であるとして Neo-Classic、Classicism と呼んで居る。兎に角彼れ
の批評家としての影響は当時の文壇に至大であって、(一八一九—一九〇〇) 彼れと九年
んで文芸批評の方面に傑出したのが John Ruskin で彼れの二代を
代表する作は Modern Painters である、彼れはセーントベリーと違い

(之は大独逸のウインケルマンの古代美術史にも比して斯界空前の大評論と称すべきもの)

絵画界の「自然に還れ」の思想を施化した人であるが批評精神の
低回は一方に強い進化的の色を帯びて居ると共に他方には公平な
美術批評の思想を持して居る人である。彼れに在つてはカーライルな
どの如く芸術を人生の実世界の下に置くような事はあまりなかつたそれ
を人生よりも上に置くような事もあまりない。二者は善く調和融合すると
写実主義であつた。其近世画家論は有名な
画家である。古人の様式に依るのを排撃し根本から之を離れ直ち
に自然に還り自然を師としたものであるので近世の画人を讃めた
る中にも批評書の名人であることを其の例とし しれない
ある。
以上両派の傾向では最も大なるはワルター・ペーター（Pater）
である。彼れは Studies in the History of
Renaissance が代表的の著述である。彼れはアー

(175)

ノルドと云ふ訳に感情を多く書いた詩にも其の快楽の方面を主として文芸批判の標準は要するに其の快を與ふると否とによつて定めるとしてゐる。併し其の立場は此の如きものであるから、Pleasure の、事に我々に伝ふる感銘あるとするところの風から更転じて Pleasure を言ふことといはれて之なる、批評は先づ感じ、此に之れを[illegible]知識に於て遊離せしめて之れを発表するに当つては彼れの此の如き立場であつたが其の全体の[illegible]価値から云へば文章なる芸術の形の整ひたるのを喜び[illegible]批評論も[illegible][illegible]したるものを芸術的なものとして、ネオクラシシズムに大なる貢献である

Pater の外に於 John Addington Symonds (1840〜1893) 等 批評の大家である

The Renaissance in Italy の著者

3. 現在で生存 Edward Dowden (1843) の如き諸家 Stopford Augustus Brooke

(1832–) Primer of English Literature ノ作者[illegible]ある Watts-Dunton (1832–)

Andrew Lang (1844–) Edmund Gosse (1849–) 等が[illegible]

え[illegible]である.

予は若い人々[illegible]

George Edward Bateman Saintsbury (1845–) [illegible]に於て

にテムズ河以後の新しい[illegible]しの将来[illegible]向きが

採れたる中の技能に於る[illegible]らしい 即ち歴史的のもの

即ち[illegible]のもの、特殊的のものの 遠[illegible]的のものもあって 動揺の時代

であるのである

十九世紀の英仏劇界

即は其の十八世紀の [illegible]

Sheridan

Goldsmith

江戸人

(177)

之を本題としたのとこれ
殆ど是非[illegible]わるに足る作品だけと云ってよい、唯現代に於いて
再び~~[illegible]~~（此の方面）作者出でし殊に最近大に色めいて来た意味で
ある現時では [illegible]（なまなり）最近作の [illegible] Debt of
[illegible] など名作の一つである。又 Arthur Wing Pinero (1855)
は The Second Mrs. Tanqueray を最大傑作とする。是は近世
英劇界の大作である。~~[illegible]~~ Henry Arthur Jones (1851)
（也子只の悲劇と評して）
~~[illegible]~~は先劇方面の大家で The Liars などが最も名の作である。
ピ子口と云ふ二人をは英作劇界の~~[illegible]~~二大なる家である。併し近頃
此二人は此方面の元老で中々の
は又に少壮詩人 ~~[illegible]~~ 小説家

中から此れ迄のつまらぬ空の人が去てまわったものです。其
重なるは劇文学者たる Barrie, Stephen Phillips,
[illegible]
には Quality Street — Bernard Shaw 抔といふ人々である (George Bernard Shaw 1856) バーリー — Admirable Crichton, Little Mary 等
が新しい名著の作、而してフヰリップスの作 Paolo and Francesca /
Ulysses 等が同様まで、ショーのは Pleasant and Unpleasant / Herod /
Three Plays for Puritans の諸作、Man and Superman 等が同様
である。ショーは尤も批評の劇は従来に多く認識せられてある。
此等が英国現代の最高最新の演劇を代表するものである。
是で今日は英文学史の講義を終らう